



教職大学院 Newsletter

No. 175

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.11.15(公開版)



今学校は、決して、ピンチではない！

福井市中藤小学校 校長 佐藤 勉

今、様々なところで、「学校がピンチ」「教員の仕事はブラック」など、教育界があたかも危機を迎えているような見解をしている場面や記事を見ます。私はその度に心が暗くなるのと同時に、心の中で「いや、違う！」と叫んでいます。私は、私が新採用教員として赴任した美山中学校時代の子どもたちも、そして、約30数年経った今の中藤小学校の子どもたちも、全く変わることなく、子どもたちの心はいつも純粋だし、素直だし、教育の根幹は決して変わっていないと感じています。つまり、今も昔も「教育は素晴らしい」と思っていますし、「教員の仕事は豊かで尊い」と自信をもって言えます。「教育界はいつの時代もブラックではなく、ブライト」です。と言うより、そうあるべきです。

しかしです。マスコミや多くの情報誌が、「中学校の部活動が教師の仕事を阻害している」や「保護者対応が教師を悩ませている」「時間外勤務が膨大」などを筆頭に、あたかも「教育が大変」的な情報を流したため、「教師離れ」が加速し、悪い風評に拍車をかけていると感じます。でも、私は部活動を通して、子どもたちと共に汗を流し、共に目指した目標を達成したことで、一生の宝となる感動体験を得られ、今でも飲み会をする程の強い絆が生まれました。また、勝負の世界における「勝つ意味、負ける意義」を学んだり、「努力は報われるときとそうでないときがある」など、人生における大切なことを学んだりすることができました。また、保護者の方からの時には厳しいお

言葉は、すべて私の言動についての正しいご指摘であり、そのお陰で、教師としての成長ができたと心から感謝しています。「モンスター・ペアレント」という言葉がありますが、それは学校での指導に対して納得がいかなかったり、学校としての対応が遅かったりするから保護者は憤りを感じ、大切な我が子を守ろうとして異論を仰っているだけと考えます。教育に不具合があるから苦言を言いに来られる訳で、しっかりとその想いと願いを受け止めさえすれば、学校としての新しい気づきや改善点が生まれ、逆に感謝することがあると考えています。私は「保護者にモンスターはいない」と思っていますし、「モンスターは校長が産む」とさえ思っています。保護者対応の根幹は「初動を含めた学校というチームとしての対応のあり方」だと思います。

そんな折、今年の6月に青少年赤十字(JRC)全国指導者協議会総会が東京本社で行われ、4年ぶりに全国各県のJRC会長が一堂に参集し、私も福井県の会長として参加させていただきました。昨年JRCは

内容

巻頭言	(1)
スタッフ自己紹介	(3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(4)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(9)
夏期集中講座報告	(14)
My Opinion	(33)
お知らせ(入試説明会案内)	(35)

創設 100 周年を迎え、これからの 100 年を見据えたスタートの年として、SDGs を絡めた JRC のあり方について皆で協議しました。午後の分科会では、私は 7 県の会長様と同じグループになり、各県の活動の様子や取組を紹介し合い、今後の課題について話をしました。その中でとても印象的だったのは、熊本県の会長様のお話でした。それは、熊本大地震のときの話で、本当に悲惨だった様子を話されました。光も暖もなく、水も食料もない世界に陥ったとき、人の心はだんだんと荒み、避難所では、怒号が飛び交ったり、言い争ったりする場面がどんどん増えていったそうです。避難所の管理者のひとり（その時は教頭）として、毎日本当にどうしたらいいのか分からず、完全に心が折れ掛かったそうです。そのとき、避難所の空気や人の心を完全に変えたのが、女子中学生の一言だったそうです。それは、「みなさん、いい加減にしてください！みんなのために、我慢をしてください！！」の心からの言葉（願い）だったそうです。この簡単な、だれでも分かる当たり前の言葉こそが、暗闇の中に居たすべての人の心に光と希望をもたらしたそうです。本当なら、私たち大人が言うべき言葉なのになぜ言えなかったのか。本来なら、人に夢と希望を与えて、人の生き方を示すべき教育者の自分が示すべき道を、なぜその女子生徒にさせてしまったのかと、とても反省をしたとのこと。でも、続けられた言葉が「だからこそ、教育は尊い」「JRC の理念である『気づき、考え、実行する』人づくりこそが、私たちのすべき道だと思います」でした。私はとても

感動し、この仕事の尊さを改めて再認識できました。そして「教育は、ブライト！」だと確信しました。

その意味でも、福井大学教職大学院のあり方は、「自己との対話・人との対話」を大事にして、自ら考え、自律する姿を理想として掲げ、チームとして学ぶ楽しさ、成長する喜びを体感できる場となっていることに敬意を表します。まさに、「教育の根幹」がここにあると感じます。実際に、本校に勤務している二人の学生たちもとても向上心があり、子どもたちの知的好奇心を伸ばし、学びを深める授業実践をしてくださっています。ただ、本校の職員と同様に、まだまだ成長すべき「伸びしろ」があるようにも思います。ぜひ自分のあり方について日々自問自答し、「自ら気づき、考え、実行する教師」へと成長することを願います。

私たちの仕事「教師」はまさに「未来を創る仕事」だと思います。未来を明るいもの、輝くものにするには、トラブルや困難に強い信念をもって立ち向かう勇気と情熱のある教師、外的なことに原因や理由を見い出すのではなく、自分の精神や健康をしっかりとセルフコントロールしながらプラス思考で仲間との和を大事しながら創造と協働できる教師が求められます。ぜひ、「教育は素晴らしく、尊い」という理念を、この福井大学教職大学院を中核として全国に広めて欲しいと願います。そして、決して偏見に惑わされないよう「夢多き、輝く未来を望む」教師がたくさん生まれることを心から切望します。



スタッフ自己紹介

福井大学総合教職開発本部 特命講師 沼尻 卓也 (ぬまじり たくや)

皆様、はじめまして。この度 10 月から総合教職開発本部に特命講師として就任しました、沼尻と申します。これまでイギリスはじめ、多くの国で教育に関わってきた経験を活かし、皆様とともに日本並びに世界の教育の質の向上に携わっていただければと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

簡単にですが、自己紹介をさせていただきます。私が教育というものに強く関心を持ったのは、青年海外協力隊として南太平洋にありますバヌアツ国に算数教師として派遣されたことがきっかけでした。ちなみにですが、私の初めての外国でもありました。派遣された当時は「世界をより良くするために活動したい」という大きな志を持って赴任いたしました。いざ現地に行くと私の住居はなく、派遣された学校の PTA 会長さんのお宅の 1 室を間借りすることになりました。そちらは電気、ガス、水道がないお宅でした。そのような状況の中、「現地の人を助けるに」来たはずの自分が、「現地の人を助けなしでは」生きてさえいけませんでした。火の起こし方、水浴びの仕方、現地の食材の使い方など、毎日が新しい発見であり学びでした。

当初はただ生きることで精いっぱいだった約 1 年間でしたが、次第に現地教員の方々から、算数教育に関して相談などをされる機会が増えてきました。そこでわかったのは、自分も含め、そもそも具体的に「なにが」問題なのか誰もわかっていないことでした。そこで現状を把握し、分析、実践を行う重要性を学びました。今振り返ると、もし自分の派遣された状況が恵まれていたら、現地のことを何もわからない

まま自分がしたいことだけをしてしまい 2 年間は終わっていたと思います。彼らとともに歩み、協力し合い、学びあう中で、本当に彼らが必要なことが見えてきました。最終的には同国初めての全国学力調査テストや算数教師組合の設置などの成果を共に成し遂げることができました。

バヌアツから帰国後、イギリスのエディンバラ大学にて修士と博士を取得しました。また、同大学や日本国内の JICA 緒方研究所にて様々な国際的なプロジェクトに携わる機会に恵まれました。その中で、まだまだ世界中の国で多くの子どもたちが教育を受けることができていない、または大きな問題を抱えているという現状を目の当たりにしました。同時に、多くの方が様々な形で、改善にむけ熱意をもって尽力する姿を拝見し、私もその一端を担っていただければと思ったのがこの道に進もうと決めた大きなきっかけです。

今年 6 月に参加させていただいた福井大学のラウンドテーブルで、様々な方々が教育・学校に関し、それぞれの立場や視点から意見を交換し合う姿を拝見し、感動いたしました。教師、生徒、学校さらには地域の皆さんで作り上げるコミュニティ。その経験や悩み・学びを共有する場は、とても幸せな瞬間でした。これから私自身もそのコミュニティの一員となり、多くのことを学ばせていただきたいと思います。福井も初めての土地ということで、不慣れな点が多くご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

正解に拘らない

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 福井市明新小学校 滝波 もも加

4月に大学院に入学してから早くも半年が経ち、後期が始まった。現在私は小学校の免許取得のため学部の授業を履修しながら、明新小学校で週1回インターンを行っている。毎日があっという間に過ぎていき、一日一日最低限のノルマを達成することで精一杯だ。生活面では自分でやりくりして生活しているため大学まで親にどれだけ甘えていたかを身に染みて感じている。

前期は、「新しい環境になれる」ということがまず自分の中で一番のハードルであった。大学時は理工学部であったため、教育の知識は皆無であり、カンファレンス時の議論に何もついていけない日が続いた。何も話を理解できず自分の意見を持つこともできない状況が続き、教育から離れたいと感じるときも多々あった。インターンでは、学校現場で学ぶという緊張や現場の先生方との関係づくりからの緊張など常に気を張りながら自分の学校での立ち位置を探していたように思う。また、インターンをする意義についてもよく考えた。インターンに行っても自己満足で全て終わってしまう自分に対して、見取りとは何か、自分のメモの仕方はこれであっているのか、この見取りをして何か得るものはあるのかなど毎日悩んでいたように思う。悩みが絶えなかった前期は正直とても辛かった。

そんな悩みが絶えない中でも充実していた時間があった。同期と話す時間だ。カンファレンスの後やインターンの後の何気ない会話が自分の中の悩みを少しずつ消していつてくれた。カンファレンス時に先生方や先輩方から「答えはないからね」という言葉をこの半年よく聞いた。その言葉を聞きたびに「またか」と正直思ってしまう、答えは誰も教えてくれないの

だと感じてしまっていた。自分の中で答えが出ない悩みを同期ととことん語り合うことで少しずつではあるが学びに繋げることができていった。自分の中でその時間があつたからこそ前期を乗り越えることができたと感じる。一緒に悩んで一緒に考えてくれる同期がいてくれることに感謝したい。

悩みの一つで一番大きかった事は、週間カンファレンス時に毎回周りとの実力の差を感じていたことだ。毎回のカンファレンスでそれぞれが現状の悩みなどを話すのだが、私自身の悩みと周りの悩みのレベルの差がありすぎて悩みを打ち明ける事さえできなかったこともあった。授業実践からの反省などの確に周りに意見を求めている方を目の前に、授業実践どころかインターン先の先生方との関係づくりで悩みを抱えている私はインターンで何を学んでいるのだろうと毎回周りのすごさに圧倒されていた。比べてはいけない、自分なりに出来ることを頑張ろうと思うもののなかなか前を向くことができず前期が終わってしまった。

夏休み期間、自分自身の前期の活動記録を振り返った。悩みの原因を考えていた所、自分の中で正解を決めつけていたことにたどり着いた。インターンで何をすることが正解なのか、見取りの正解は何なのか、カンファレンスで何を話して意見を深めていくことが正解なのか、自分の中で正解に拘りすぎて自分自身の現状のレベルをしっかりと見つめ考えることができていなかった。「正解はない」と言われているのにも関わらず、正しい答えを自分でこれだと決めつけていたのだと振り返ってみて感じた。もっと自分の実力を知り、自分に何ができて何ができないのか自己分析をしようと考えを改め直した。この夏休

み期間考え直したことをきっかけに気持ちが少し楽になった。

正解がないのなら自分が思うままにやってみればいいのだと何かねじが外れたように気持ちが変わっていった。そして、失敗することの恐怖心がなくなった。言い方はよくないと思うが、開き直ったと言ってもいい。開き直す代わりにこれからはいろんなことにチャレンジしていこうと決めた。正解に拘らず、自分に出来ることを精一杯やり、出来ないことは素直に受け入れ開き直って次につなげようという気持ちを大切にしようと思った。正解に拘って慎重になり

すぎて縮こまってしまうよりも今のうちに失敗して学びをたくさん得られるように後期からは頑張っていきたい。

今回の報告では、インターンの授業実践の細かな内容やカンファレンスでの深い学びの内容などを述べようと思っていたが、あえて自分の前期から今までの心情の変化を報告した。この今の気持ちを1年後、2年後、この先教員になってからも忘れないようにしたい。後期から、周りの方々への感謝の気持ちと素直に受け入れて挑戦する気持ちを頭において努力していきたい。

悩みと向き合う

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 福井県立科学技術高等学校 松田 美穂子

大学院に進学し、早くも半年が過ぎた。この半年間は、私にとってあつという間で、非常に密度の濃い期間となった。学部生時代の生活とは一変して、学校現場での学びが多く、より教師となる実感が湧いた期間でもあった。インターンシップや金曜カンファレンスを含めた大学院での授業などにも慣れ、自分なりの生活リズムもできてきた。インターンシップ先では、年間を通した授業実践、様々な先生方の授業参観、特定の学級に入って学級経営を学ぶなど、3つのことを中心に取り組んでいる。

その中でも特に学びとなっているのは、年間を通した授業実践である。授業実践を行う初めの段階で自分の専門的な知識や授業力が不足していることを痛感した。学部生の時、あれほどまでに生徒が楽しいと思う授業がしたいと考えていたにもかかわらず、楽しい授業ができなかった。知識不足、自身の想い、生徒の想い、生徒の将来、様々な理想と現実にぶつかり、何度も挫けそうになった。教材研究するための資料収集、収集した資料を読み解いて理解する学習、理解した知識を基に授業の立案、何度も繰り返し行った。どれだけ時間を割いても、自分が納得する授業ができず、毎日悩んで、自分の未熟さを知った。こうして私自身と葛藤することで、授業に対する軸ができ

た。それは、生徒が“社会に出て活かせる学び”の時間にしたいということである。もちろん、授業の内容すべてが社会に出て活かせる内容とすることは難しい。しかし、社会に出た時、一人でも多くの生徒が「授業で学んだことだな」と学びを活かせる瞬間をもって欲しいと思った。

多くの時間、自分と向き合ったことで、急激に自分を成長させることは難しいと改めて感じた。焦るのではなく、未来の自分に期待を込めて、今の自分ができることを着実に取り組んでいく必要があると思った。それは、金曜カンファレンスで、私自身や同級生、先輩との話し合いの時間を通して持てた考えである。金曜カンファレンスでは、日々の悩みや葛藤、不安を聴いていただき、アドバイスを頂くことができる時間がある。金曜カンファレンスの時間は、私にとって、どんなことに取り組んだか、どんな悩みができたかを整理する時間となっていた。また、同級生や先輩の取り組みや悩みも聴くことができ、同じ悩みを抱えているときなど、私自身の学びにつながった。

インターンシップや金曜カンファレンスを通して、様々な悩みを抱えたのだが、特に2つを挙げる。1つ目は、生徒を見取ることである。授業を行う際、自分

の授業で手一杯になってしまい、生徒の表情や変容など、周りが見えず授業を進めてしまうことがある。生徒の姿を見取することは、授業の際にも、将来、学級担任となる際にも必要な力である。生徒から出た疑問を拾い上げながら授業を進めている先生や、生徒同士の関係性や生徒の状況、変化を把握して生活指導している担任の先生の姿を目の当たりし、自分が担任になった時に、生徒を見取ることができるのか不安になった。そこで、金曜カンファレンスで悩みを打ち明けたところ、焦らずに授業を進めていくことや他の先生と情報を共有することで生徒を見取ることが可能になるのではないかとといったアドバイスを頂けた。私自身、焦って授業を進めようという考えが生徒を見取ることの妨げになっていたと思う。

2つ目は、主体的な学びについてである。主体的な学びは、生徒にとっても、教師にとっても必要な学

び方であると思う。そのため、全てを主体的な学び方にするのが良いのではないかと考えてしまっていたことがあった。しかし、金曜カンファレンスを通して、どのような場面で、どのように取り入れるかの絞って考えると良いといったアドバイスを頂いた。主体的な学びを取り入れなければいけないという気持ちも大切であるが、取り入れることに重きを置くのではなく、取り入れることで学びが深まる最適な場面を見つけて、主体的な学びの場面にしていきたいと思った。

ニュースレターを執筆することで、自分の悩みや目標などが明確になり、振り返りの大切さを改めて感じた。これまで振り返ることを忘れてしまったり、忙しいからと後回しにしてしまったりしていた。これからは、振り返ることで悩みを明確にし、自分の変容に気が付いていきたい。

金曜カンファレンスが〇〇を創る

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

加福 智哉

10月に入り、ようやく金曜カンファレンス（以下金カン）がスタートした。金カンでは1年間を通した『「生きた学び」を問い直す』というテーマを設定し1年かけて「生きた学び」を考えていく。M2はそのテーマを追究していくにあたって、どのようなサイクルを構築していくのか、どんな学びを展開していくのかというデザインを考えている。これまでのサイクルのデザインとして、「これから求められるものはなんだろう。（未来）」「今はどんな学びの姿が見られるのだろう。（現在）」と「未来の姿」から「現在の姿」について金カンの中で考えてきた。

ここまでのを終えて、約2か月間の夏休みに入ったが、その夏休み中に、8月3回、9月1回と計4回M2のメンバーが自主的に集まり、企画を行ってきた。まずは前期の省察を行った。この省察ではM2のことよりもM1のことがメインで行われた。M1の状況はいま

どのような様子なのか。昨年度、今のM2がぶち当たった壁にぶち当たっているM1の様子が少し状況としてあがってくる。私たちM2は、昨年度「私たちが困ったようなことにならないように」とデザインを工夫しながら行ってきたが、完全に無くすのは難しかった。M1の時には分からなかったが、M2になり、金カンを運営していく立場になってM2の苦しさ大変さが分かった。自分たちがやりたいこととそれを実現する難しさである。

金カンの企画はM2、12名全員で行っており、その企画では司会などを順番で決めながら行っている。12人の思いや学びを大切にしながら、M1の学びのことも考え、一筋縄ではいかないことがほとんどである。誰かの考えを採用したり、あるいは没になったり、折り合いをつけたりと何が最適なのかを12人全員で考えながら行っている。当たり前かもしれないが、多

様な意見を尊重しながら、一番いいものを生み出すことに私は大変さを感じている。しかし、M2 も企画を重ねながら成長しているところもある。それらをM2 で実感したり、企画に参加してくださっている先生方に価値づけしてもらったりと様々な形で成長を感じている。そのような過程を経て今に至っている。

後期からの金カンは、「未来→現在」と考えてきたため、「過去」について考えていく。これは「過去の教育」について考えるのではなく、「昔から変わらないもの。（教育の原点）」について考えていく。この「未来→現在→過去」の視点から生きた学びを問い直し、またそのあとにサイクルをデザインし「生きた学び」を追究していく予定である（これ以上書くと M1 にネタバレするので書けません...）。

後期に入り、1 回目の金カンを終え、久しぶりの緊張感があつた。この緊張は、久しぶりにファシリテーターとして、院生の学びをつなぎ、広げていけることができるのかといった不安が大きかった。上手くやりたいという思いはあるが、なかなか上手くいかず、ある程度割り切ってはいるが、それでも上手くやろうとしてしまう。またそこにファシリテーターの難しさを感じる。ここでのファシリテート力は今後、学校での授業につながることもあるため、頑張っていきたい。また、金カンには他の難しさがある。それは週に 1 回しかないことだ。1 週間も空くと先週やっていたことを忘れることも多く、学びをつなげてい

くのが難しい。しかし、これが良さに変わるときもある。この 1 週間の間に院生は各校にインターンシップに行っていたり、大学で授業を受けていたりする。この冷却タイムにより、自分の考えの変化、観の転換が行われるときもある。そのため、金カンでの学びと、インターンシップや大学の授業の学びをつなげることを意識しながら私たち M2 は金カン进行している。金カンは年間で 30 回程度だが、自分自身の変化も感じることができとても面白いと私は感じている。

最後に、金カンの学びは何十年後に見えてくると私は考えている。金カン中によく、「答えは何なのか」「これが何につながるのか」という言葉を聞く。これは目先にとらわれすぎているのではと感じてしまう。私たちストレートマスターは、授業を上手くしたい、見取りが上手になりたいという思いは全員共通で持っているだろう。そのため、こういった言葉が出てくるのではと考える。目先のことを解決してもまた新たに目先の課題が出てくる。これを一つずつ解決していくことも大切だが、年 30 回程度の金カンでは限界がある。金カンでは、先人の知恵を学び、他者の実践や考えを知り、自分の教育観を形成していく。これが、すぐ生きることもあれば、どこかの片隅にあり、ふとした時に自分を助けることがある。これが何十年先の話になるかもしれない。金カンは苦しい時間でもあるが、自分の未来を創る機会と捉えあと半年間頑張っていきたい。

「分からない」と向き合うとは

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

松浦 妃南

「分からない」と向き合うとはどういうことなのか。学校にいと様々な「分からない」に出会う。「先生、この問題分かりません。」「言っている意味が分かりません。」「なんでこれしないといけないのか分かりません。」「何が分からないのか分かりません。」生徒との関わりの中だけでなく、大人同士でもよく

ある。私自身の中でもそうだ。「分からない」という状態に陥るのは誰しもあるが、この「分からない」と向き合うと成長につながると思う。だからこそ、この「分からない」状態は貴重で価値のあるものだと考えている。

しかしこの「分からない」と向き合うことは時に苦しくなることがある。インターン校での数学の授業の時間、ある1人の生徒の個別支援をしていた。その生徒は学力が低い生徒で、数学の知識も算数のレベルからつまづいていた。そんな生徒に「二次方程式の計算問題が分からない」と言われ、私はその「分からない」状態を少しでも具体化できるように声掛けをしようと意識した。解答用紙を見ると、白紙ではなく式を色々変形して試行錯誤した形跡が見られた。そのため「これはどう考えたの?」「この式はどうやって出したの?」と聞いていった。いくつか質問していくうちに、その生徒はそもそもの状態になれば答えが求まったと言えるのか分かっていないことが分かった。そこから1つずつ丁寧に声掛けしながら教えていったが、つまづいている箇所が多く、度々重なる「分からない」という状態に「やっぱり私には無理です」となってしまった。

私は、どこにつまづいているのかという「分からない」状態を自分自身が自覚しないと意味がないと思っている。だから、教師が一方的に「ここがこうだからこうでしょ」といってしまうのではなく、「どうしてこう考えたの?」とまずはその子の考えを聞き、どこでつまづいたのかを明確にしたうえで、少しずつヒントを出しながら最終的には自分で解けたという達成感を得てほしいと思いながら関わるようにしている。ただ、それには時間がどうしてもかかる。前述した生徒のように、その過程で嫌気がさして向き合うことに拒否されてしまうこともある。こういった「分からない」に向き合うにも難しさがあるが、この場合は答えが1つに決まっているから「分からない」に寄り添う側としての支援は比較的イメージしやすい。これに対し、最近もっと難しいと感じているのは、答えが決まっていないゴールが見えないものに対する「分からない」と向き合うことである。

10月の金曜カンファレンスでは、カントの「啓蒙とは何か」をめぐる資料群を検討している。この資料は理解するのが中々難しく、昨年読んだ時も「何のためにこれを読んだのか分からない」とM1同士で

話していたのを覚えている。そんな資料を今年も検討することになり、昨年度の自分たちのように今年のM1も資料に対して困難さを感じるだろうという予想は容易であった。実際、どの院生もやはり難しさを感じたようだった。

そこでM2は運営会議にて各グループの様子を共有を行い、「分からなさ」を抱えているM1への個別のアプローチを共有した。そしてこれまで通り、各グループのファシリテーターであるM2がグループのメンバーに合わせて進め方を考えていくことになった。しかし運営会議が終わった後、先生方と話す機会があり、現在、M1の「分からなさ」に関する状態の共有は出来ているものの、それに全体としてどう寄り添うのかについての議論は深まらず、各自の支援に任されていることに気が付いた。

「分からない」と向き合うには、2つの方法があると考え。まず1つ目は個別で対応する方法である。これについてはこれまでも十分気を配って意識してきたことでこれからも続けていかなければならない。2つ目は、全体で対応する方法である。全体で対応するとは、例えばグループでの議論に入る前の全体としての導入でどのように議論にうつらせるのか、何を議論するといったのか等の工夫である。この2つは、授業作りの構造そのものだと思った。どちらが正しいかではなく、どちらも必要な視点である。これからは2つ目の全体として「分からない」と向き合うには、どのような手だてをとると良いのかについて考えていく必要があるのかもしれないと思った。

金曜カンファレンスはただ1週間の学びを話す場ではない。授業作りに大切な視点を、身をもって実感できたり、「分からない」に向き合い続けた結果、新たな課題が見えて再度向き合う必要性が生まれたり気づきが多い。金曜カンファレンスってこういう場だよな、と改めて価値を感じ、後期のカンファレンスも充実したものにしたいと強く思った。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

学び続ける

ミドルリーダー養成コース1年/ さくら認定こども園 山田 ゆみ

教職大学院に入学してもう半年が過ぎた。コロナ渦だった数年間がいつの間にか過去になりつつあり、今度はその分の何かを取り戻すようにまた世の中は変化が始まっている。園でも行事などの見直しが始まり、会議で様々なことをあれこれ検討しながら進んでいる。そんな中、今年度私は何十年ぶりにクラス内で「副」が付く立場となった。中堅の教諭がリーダーとなり、新任や若手の教諭もいる。今思えば、クラスの若い教諭を支えていかねばならないという変な使命感があり、ひとりで勝手に何かを背負っていたように思う。職員関係にこれまでになく悩み、カンファレンスでその思いを正直に話した。すると誰もがその話を自分のことのように受け入れて、否定することなく聞いてくださった。そして、自分と同じように悩んでいる先生方がたくさんいらっしゃるのだということも分かり、安心したのを覚えている。カンファレンスを繰り返すうちに、次第にここで対話することが面白いと思うようになっていった。そう思えることが自分でも不思議だったが、自分の思いや考えを素直に出してもいいんだと安心できる場所になっていたのだろう。自分がそんな思いを感じてから、「そうか、きっと教諭であっても同じなのだ。なんでも話ができるという空気感が職員の間に必要なのだ」と思った。しかし、クラス担任でじっくり話をする時間すらその時にはなかった。それならまずはその時間を作ることが必要だと考え、早速勤務時間の中で話ができる時間を見つけて提案し、まともな話し合いの時間が取れるようになった。担任同士子どもの為に同じ方向を向いて保育ができるようにと思い始めて、ようやく一歩だけ踏み出せたところだ。自分が

動かなければと思わせてくれたのはここでの対話のお陰である。待っていても何もやってこない。相手を変えるよりまず自分を見直す必要があったのだ。

また、夏期集中でじっくりと本に向き合ったことも私にとっては非常に貴重な時間だった。普段本を読む事がなく、日々の保育に追われて実践ばかりだったところに、理論の時間を設けて頂いた。「コミュニティ・オブ・プラクティス」という本を初めて知り、初めて読み、実践コミュニティの中にいる自分を初めて客観的に見ることができた。保育の世界がとても広く感じて新鮮な気持ちになった。「結局は人が人と人とを結びつける」という言葉があったが、人を巻き込み、共に学習し、信頼し高め合いながら発展していく事は、今の悩みの解決にもつながってくる。私の役割は、一方的に教える事でも支えることでもなく、一歩下がる事でもない。私は「副」というひと文字にとらわれすぎていたのではないだろうか。

現在勤務する園は私にとって母園であり、元園児が保育教諭として戻ってきた第1号だ。この園で勤務して20年以上になるが、それは強みでもあり時にはその反対でもあると思っている。積極的に他の園や学校の取り組みを知り、その学びを自分の園で生かすことも目標のひとつである。今年度はすでにその機会をたくさんいただいているが、自分には何が真似できるだろう、自分の園にはどんなやり方が合っているだろうと考える。ただ自分の中に収めるだけでは何も変わらない。学びを得た後にどう行動するか？目の前のことからひとつずつ取り組んでいきたい。

あつという間に

ミドルリーダー養成コース2年/ 福井県立若狭高等学校 横田 和也

あつという間に後期になってしまった(本校は2学期制)。この半年、ここで紹介できるような実践ができたかと言えばそうではない。

一方で、生徒たちは、授業はもちろん、探究活動や学校行事など、様々な場面で活躍し、成長を続けてくれている。

今回は、主担当である国際・社会探究Ⅰでの生徒の活動を紹介したい。昨年度、大学院に入学させて頂いて、省察的实践、クロス・セッションなど対話に基づく豊かな学びを体験的に学んできた。生徒にもこのような学びをしてほしいと考え、国際・社会探究Ⅰでは、自分たちの活動を定期的にレポートやスライドにまとめ、探究テーマを超えてグループを編成し、クロス・セッションを行ってきた。

コロナ禍も収まり、制限が解除される中で、生徒たちは、これまで以上に地域とつながり、地域の方々と共に活動する場面が増えた。例えば、高浜小学校、高浜中学校、上中中学校の皆さんとは、SDGsの実現に向けて「エシカル消費ワークショップ」を行い、児童・生徒の皆さんの行動変容を促す取り組みを行った。内外海小学校の2年生の皆さんには、クイズなどを取り入れながらSDGsを理解するための出前授業を行った。

また、雲浜小学校、大飯中学校の皆さんには、探究レクチャーを行い、各校の総合的な学習の時間をよりよいものにするために活動した。各学校とのやり取りは、基本的に生徒が行うなど、生徒が主体的に取り組んだ。活動を通して、自らのSDGsや探究に対する意識も向上し、ワークショップや出前授業も、回を重ねるほど改良するなど、工夫する姿が見られた。まさに、省察的实践を体現しているのではないかと感じた。

国際交流チームは、地元のキッチンスタジオを借りて、地元の外国人の方と若者が交流するイベントを行った。その後、自分たちの探究目標と実践を省察し、そもそも外国人の方と交流するとはどういうことか、など哲学的に思索する場面も見られた。

廃校活用チームでは、廃校活用イベントを企画し、廃校を管理する公民館の方々と協働し、自分たちの強みを生かしたスポーツ、アート、ダンスを取り入れたイベントを開催した。自分たちの予想を超える来客者、地元のお年寄りの方からの喜びの声、達成感など、自己肯定感が高まったように感じる。

このチームとクロス・セッションを行っていた別チームが、次は一緒にイベントを計画させてほしいという提案をしていた。クロス・セッションを行ったことで、お互いの活動内容や思いが共有され、そこから新たに共創する場面が見られた。1 + 1 = 2以上となる経験を積んでいるように思う。

今後も、小中高が垣根を越えて連携する探究イベントを計画しているチームもある。「やりたいことベース」の探究(学び)の力強さを感じている。

このような活動を今後は省察的に言語化してまとめていく活動も行っていきたい。その中で、自分たちが身につけた資質・能力に改めて気づいたり、自分たちが取り組んできた探究活動の意義を感じたりしながら、探究活動を超えて日常に応用できる力に昇華できるようにしたい。

さて、このような生徒の成長の中、私自身もいよいよ実践記録を仕上げる時期になってきた。私自身も、一度立ち止まって、省察的にこの半年を振り返ってみたいと思う。

悩みながら取り組んだ校内研修

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/鯖江市神明小学校 岩佐 麻衣子

教職大学院に入学し、合同カンファレンスやクロスセッション、ラウンドテーブル、夏期集中講座等に参加し、多くの先生方や様々な職種の方々とお話をさせていただく機会を得た。その中で、これまで自分がめざしてきた教育観・教師像から脱却し、新たな学びへと転換していかなければならないことを実感した。また、学校全体で新たな学びへの転換を進めるためには、校内研修が重要であることを学んだ。そこで、校内研修について振り返ってみたい。

本校では、昨年度から各学年で「戦略マップ」を作成し、日々の教育活動にいかしてきた。そこで、4月、新たな管理職と教職員のメンバーを迎え新体制がスタートするにあたり、今年度の戦略マップ作りにとりかかった。昨年度の成果と課題を踏まえてスクールプランに基づき、めざす児童像や研究主題、研究の方向性についてコア・メンバーと話し合い、枠組となるものを決めた。研究推進委員会でその枠組を検討し、全体研究会で共通理解を図った後、各学年部会で具体的な取組やその内容について話し合い戦略マップ上にまとめていった。年間の取組を可視化することによって今年度の見通しを立てることができた。特に、11月には創立150周年記念式典が予定されており、各学年で「ふるさと学習」の学びをステージ発表や掲示物として紹介することになっている。児童が、ふるさとのよさを実感し紹介したいと思えるような学習を計画的に進めるためにも、戦略マップを有効に活用していきたい。

夏季休業中には、校内研修として「ファシリテーション」について学ぶ現職教育を実施した。対話が重要となる学びの中で、ファシリテーション能力はこれからの教師に求められる欠かせない資質・能力の

一つである。教職大学院の富永良史先生を講師としてお招きし、グループ演習を交えながら講義をしていただいた。どの意見も受け止めて認めながら話し合いを深めていく富永先生の姿から、話を聴く姿勢や問いの大切さを学び、のびのびと自分の考えを話す楽しさを実感した。振り返りでは、この研修での学びを今後の話し合いや集団づくりにつなげたいと感じている先生が多かった。

9月下旬には、全国学力調査や鯖江市確認テストの結果を受け、現職教育で学力分析を行った。本校の課題を明確にし、授業改善や学力向上につなげたいという校長の思いを受け、教務部会を開き、本校の結果をもとに学力分析の進め方について話し合った。その際、教職大学院での5月の合同カンファレンスを参考にし、現職教育では、最初に全国学調の問題を先生方に解いてもらうことにした。また、国語科と算数科の主任から出題の意図や求められる資質・能力について簡単に説明してもらった上で、児童の誤答例や解答用紙を見ながら、各学年で課題や今後の対策について話し合った。落ち着いて担当学年の現状や課題を見直し、対策を考える時間を確保したことで、有意義な話し合いをすることができた。今一度、スクールプランや戦略マップを見返し、それぞれを絡めながら授業改善に取り組んでいきたい。

これらの校内研修を企画する中で、私は、先生方の学びをコーディネートすることの難しさを実感し、とても悩んだ。それは、子どもと同様に教員の学びもスタイルが変化しているのに、私自身が価値観を転換できていなかったからだと気付いた。今後は、自分自身の発想を転換し、学校全体で有意義な学び合いができるよう、一つ一つ実践を重ねていきたい。

社会で生きてはたらく力を育む学校

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 小浜市立小浜中学校 廣澤 喜教

1. 子どもの自律心を育む学校づくり

私は若いころから授業づくりや学級経営も常に自転車操業だった。時間をかけて子どもたちの話を聴いたり、子どもたちと共に汗を流したりしながらそれを埋め合わせてきた。しかしそれは、自律に向けて歩む子どもたちを支援するものではなかった。

「捕った魚を子どもに与えること」よりも、「魚の捕り方を教えること」のほうが大切だと教えていただいたことがあった。私はいろいろな魚がいることを伝えたり、魚の捕り方を身につけさせたりすることに関して十分な力量を持ち合わせていなかった。

転機は二校目に赴任した時に訪れた。教室から集会に向かう生徒たちを追い出したり、集会から教室に戻る生徒の様子を廊下や教室付近で観察したりする教師は誰もいないことに驚いた。その理由にはすぐに気づくことができた。活動の主体は生徒であり、子どもに任せることは当然であるということが教師集団に根付いていたからだ。子どもたちが社会で力を発揮するために、経験を積ませる教師の関わり方を具現化していた。そこでは問題が起きることは当然として、その時にどのように考えさせるかを準備しておくのが、教師の務めであった。

もう一つの転機は、学年主任になったときだった。日頃は何事にも主体的に取り組んでいる生徒、学力が高い生徒、様々な生徒が校外学習や修学旅行において委縮し、人任せにして行動に移せない姿をいくつも目にすることになった。それは普段の姿から想像ができないものであった。この状況を変えるべきカリキュラムから見直すことを決めた。

2. 社会性を育むカリキュラムの編成

それから6年間かけて、「社会性を育む総合的な学習」のカリキュラムマネジメントに努めてきた。最

近になってようやく学校全体で取り組む体制が整ってきた。その原動力となったのは、校内で最も若い先生方の実践への理解と探究力であった。それらをベテランの先生方が支えるかたちでカリキュラムは成熟してきた。各学年の総合的な学習の担当や学年主任間の対話では、それぞれの考えの溝はなかなか埋まることはなかったが、若い先生方の中にコアメンバーが増えていくことでその変革はもたらされた。現在は、1年生では「自分自身のルーツ（生命）を探ること」「自分の地域を知ること」を、2年生では「魅力的な人物（生き方）と働き方」を、3年生では「社会を豊かにする学習」を体験的かつ探究的に学習するカリキュラムが確立した。社会の中で多様な人の多様な考えにふれ、対応力の高い人物に育ってほしいという願いをもって実践に取り組んでいる。

3. 教科を横断して育む汎用的な能力「主体性・協働性・創造性」

勤務校が昨年度までの2年間、授業力向上の指定を受けたこともあり研究主任を中心に教科を横断した汎用的な資質能力の育成に取り組んできた。教師は3～4人の異教科ユニットを編成し、各教科の授業で明示的かつ集中的に特定の汎用的な能力を高める取組である。教科で育むべき力を最優先としながらも設定した汎用的な能力の育成に努める取組は完成を見ていないが、重要な視点であると実感しており、異教科ユニットは解体したものの、各教科と特別活動や総合的な学習、道徳科を横断した授業づくりに努めている。

今年度は研究主任に力になってもらい、教師自身が主体的・協働的・創造的に学ぶことを副題に掲げ、教師の個人探究研修をスタートした。カンファレンス形式の研修をこれまで4度設けたが、まだまだ省察的に考えを整理し、実践を語り合う気風は整って

いない。そこでは、一部の教師が語り続けてしまい、互いに傾聴し支え合う関係になっていない。また、各グループをファシリテートする先生方の経験が浅く、カンファレンス形式の研修を経験した先生が少ないことも課題となっている。

それもあり、福井大学の支援をいただいてファシリテータを数名派遣していただくことが決まった。

カンファレンス形式の研修は時間をかけないと成熟しないと大学院の先生方からもご助言いただいている。焦らずに、でも着実に。学び続ける教師集団の形成を後押しし、教師の成長によって子どもたちの社会で生きてはたらく力をよりいっそう育成できる環境を実現させていきたいと考えている。

棚が完成しました

学校改革マネジメントコース2年/ 坂井市丸岡南中学校 福嶋 大晃

学校祭「校内製作部門」の生徒が、教室で使う棚を製作した。棚が完成し、学校祭で製作過程を発表したことで、一段落。現在の私は、この実践について長期実践報告に書こうと、省察している。今回のテーマは、「校内の様子や現在の取り組み状況」ということで、校内製作部門の生徒の様子を報告する。

GW 後、校内製作部門の部門長（1名）と副部門長（3名）が決まった。製作部門4名は、全員女子。活動内容を考えると男子が集まりそうだったが、女子が手を挙げた。私から、具体的な活動内容を伝えと、製作部門4名は「明日から集まって打ち合わせをしたい」と、きらきら目を輝かせた。

製作部門4名が話し合った後、部門長は「アンケートをしようと思います」と、質問内容を書いた紙を私に持ってきた。私は、アンケートの紙を印刷・配付・回収するのは紙資源保護の問題だと思い「Google フォームやってみる？」と声をかけると、部門長は喜んだ。アンケート結果をもとに、製作部門4名は棚の設計図を考え始めた。4名それぞれで設計図を描き、1番いいものを選ぶと始まった。しかし、部門長が中心となってアンケート結果を分析して対話しているうちに、4人で1つの設計図を描くように変わっていた。自分たちで話し合いを始めることもできなかったバラバラだった4人が、いつの間にか1つのチームに変わっていた。

製作部門4名は、地域の企業「末政建設」社長に、棚製作の企画をプレゼンした。「なぜ棚が必要なのか?」「生徒や担任の先生がどのような棚を求めているのか?」パワーポイントを使って説明し、設計図を出した。設計図について、社長から専門家の視点で次々と質問がある。部門長を中心に、質問に対して受け答えをする。製作部門4名は設計図について対話している中で、そんなことまで考えていたのか?私は、生徒の様子を見取るところか、見とれた。すごえ〜。

「514,008 円!」末政建設社長は、ホームセンターへ行き、ホームセンターで販売されている価格で材料費の見積もりを考えてくれた（末政建設の利益は0円である）。予算の20万円を大きく超えてしまっている。このことを製作部門4名に伝えと、「50万円!」と息が止まった。「どうする?」と私が聞くと、「壊れている棚を修理するだけにします」と意気消沈した返事が返ってきた。

製作部門4名は甦った。末政建設社長から届いた見積書・木割書・設計図の資料を読み解き、予算に合うように設計図を作り直した。製作部門が作り直した資料では、222,384 円 + α まで材料費を下げた。「残り 22,384 円 + α は、生徒と先生から募金したい」。製作部門4名は校長室へ向かった。資料を広げ、現状を説明した。校長先生は寄付を集めることを認めた。

製作部門4名は、全校生徒に呼びかけ12,859円を集めた。「残り1万円!」ゴールが見えてきた製作部門は、走り出した。「先生たちのところに行って、寄付をお願いしてきます」。教員にも寄付を募った製作部門4名が戻ってきた。興奮しながら、寄付の合計を計算し始める。合計33,392円の寄付が集まった。

2回目のプレゼンが始まった。製作部門4名は、末政建設社長に、作り直した資料を使って説明した。説明が終わっても、社長は資料から目を離さない。しばらくして、社長は資料を下ろし、ゆっくり話し出した。「1回目の打ち合わせの資料では、見た瞬間に予算の20万円をはるかに超えてしまうことが分かっていた。でも、中学生に、木材は決まった大きさで流通されていること、その大きさを考えて木割り・設計しないと予算を考えることができないこと、そのよう

な勉強をしてほしくて予算を大きく超えた見積書を出した。今回の資料を見ると、しっかり勉強して上手に設計してある。とてもすばらしいと思う」。怖い顔をしているが、製作部門4名の頑張りを褒めた。部門長は、嬉しそうに何度も頷いた。

製作部門4名に10名の生徒が加わり、末政建設社長、大工さん、地域コーディネーターに手伝ってもらいながら作業が進み、棚が完成した。

この実践を通して、生徒が主体的・対話的で深い学びができるよう、私は意識した。また、地域と共にある学校が必要であると仮定し、その根拠を探した。私の中で多くの葛藤があったが、カンファレンスで支えていただいたおかげで、実践を省察する準備が整った。ありがとうございます。今後とも、ご指導よろしくお願い致します。



夏期集中講座報告

子どもを待つ姿勢とコミュニティを広げる「発信」

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 福井市安居中学校 柴田 和輝

夏期集中講座のサイクル1とサイクル2に参加した。サイクル1では、実践記録として、『福井発 プロジェクト型学習』の本を読んだ。福井大学附属義務教育学校のプロジェクト型学習について詳細に書かれていた。その特徴は、3年間にわたってプロジェクト型学習が展開されていくこと、生徒が自分たちでプロジェクトを企画し、実践していくことだ。私は学部時代に教育実習で附属に行った経験があるので読みやすく、内容も理解しやすかった。

この本を読んでいて、特に附属の先生方の「待つ姿勢」が印象に残った。子どもたちがプロジェクトの内容を決め、自分たちの手で進めていく。それを先生はとにかく待つ。なかなか話し合いが進まないとき

にも、先生はアドバイスをして待つ。ここまで子どもたちを信じて待てるのかと率直に思った。私自身インターン先の学校で生徒と関わっているが、待つことは難しいと感じている。何か困っている生徒を見かけると、自分の方から「どうしたの?」「～したら?」とすぐに声をかけることが多い。それでは子ども自身が考え、動くことにはつながらない。主体性は身につかないと感じる。子どもたちのことを思って、教師が介入することが、子どもたちの成長の機会を奪うこともあるのだ。そういったことを踏まえ、待つことが子どもたちの成長を生むということは心にとめておきたい。

サイクル 1 のクロスセッションでは、私以外のお二方が伊那小学校の実践から気づいたことや学んだことを報告してくださった。その中で、「教師は『学習のたね』を与えることはあっても『芽』を与えることはできない」という言葉が印象的だった。それは、教師が子どもの興味・関心を引き出しつつ、子ども自身が学習を進めていけるようにすることだと考える。そのためには、子どもの姿を見取り、心に寄り添うことが大切だと感じた。

サイクル 2 では『コミュニティ・オブ・プラクティス』を検討した。この本では、「実践コミュニティ」の重要性とそれが成立する条件について書かれていた。この本のキーワードである「実践コミュニティ」というものになじみがなく、非常に難しい内容で読むのに苦労した。しかし、他の院生と話しながら読み進めることで理解が深まった。例えば、「実践コミュニティ」の七原則が教職大学院のカリキュラム（デザイン）に当てはまることを他の院生から教えてもらった。確かに、言われてみるとそうだったと思った。「親近感と刺激を組み合わせる」という原則は、大学院で月間カンファレンスとラウンドテーブルが組み込まれていることに合致していると気づいた。このように、自分の身近な組織と重ね合わせて読むことが大切であると分かった。

クロスセッションで興味深いと感じたのは、「実践コミュニティ」である条件として、「発信（コミュニティを広げていく活動などを指す）」が必要だということだ。同じグループの大畑さんが話してくれた。大畑さんがインターン先の学校で、授業研究をするコミュニティをつくったが、大学院の先生から「それは実践コミュニティに限りなく近いもの」と言われたそう。大畑さんは非常に驚き、少し残念だったと話していた。これには私も非常に驚いた。「えっ、実践コミュニティではないのか」と。このことから、自分が「これはさすがに実践コミュニティだろう」と思っているコミュニティが、そうではない場合が多いのではないかと思った。自分はフットサルサークルなど、いくつかコミュニティには参加している。しかし、自分自身が「実践コミュニティ」には参加していないことに気づかされた。仲が良い人同士で集まり、共通の物事（スポーツなど）に取り組んでいるのは「コミュニティ」や「サークル」であって、「実践コミュニティ」ではないのだ。

本文献を読んで「実践コミュニティ」は、自分自身を大きく成長させてくれるものだと分かった。学び続けることが求められる教師にとって、積極的に参加すべきものだと考える。今後の人生でチャンスがあれば参加していきたい。

自分の視点を捉え直す

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 福井市中藤小学校 伊達 あさひ

夏期集中の cycle1 から cycle3 までを通して自分の記録の取り方について、改めて見直す期間になった。自分の書いたものを見返すと以前に比べて記録の取り方に変化があった。

インターン当初は授業全体の記録を 5 か月取り続け、自分の満足のいくものを取り取ることが今までできていなかった。記録を見返しても、事実だけが書かれており、そこからは子どもの考えやなぜこのような

発言を子どもはしたのかを読み取ることができなかった。これは見る視点を全体的にしていたことが原因である。全体的に記録を取っているため、子ども 1 人の言動に注目したり、なぜそのような発言をしたのかなど書かれておらず、抽象的に物事を捉えており、書いたものを説明するときも抽象的に話をしてしまうことが分かった。

しかし、途中から教師と児童のそれぞれの話している内容について見るようにした。授業全体を記録していたが、子どもと教師の発言に着目するようになった。理由としては、配属校である中藤小学校の校長と面談をしたときに、今の記録の取り方はどういう発言を教師がしたときに子どもは答えることができ、答えることができないのかが分かるから面白いと言っていたので、そのまま変えることはせず取ることにした。子どもと教師の発言を記録してみるものの、すぐに子どもへの発問は大きく分けて、はいいいえで答えられるような発問か、具体的に単語や説明で答えられるような発問のどちらかで分けられていることに気づいた。校長がそのまま同じ方法でするように言ってくださったのは私が出した答えとは異なるものが見えてくるということを伝えなかったのかと思った。そのため、校長がどうしてこのままでいいと言ってくださったのかが分かるまでは、変えずにこうと決めた。

金曜カンファレンスで記録を見直す時間があつた。ある院生は1人を追っていたり、ある院生はグループを追っていたりしていた。それらの記録には子どもに視点が向けられているということが分かっていたが、自分ののは、どこに視点が当てられて取られたものであるのかが分からずにカンファレンスが終わった。その状態のまま、夏期集中に入ってしまった。夏期集中時に記録を見返すことで、そのようなことをする意味とは何かを考えることがあつた。印象深いことがあれば記録を取らずとも覚えていたり、そのようなことをするべきことがある場合は取ったりなど、何かに視点をおかずともするときになったら取るのではないかと、記録を取る必要性はないではないかと思ってしまった。ある先生に、記録を取るの意味とそのようなことをする価値とは何かを聞いた。記録を取ることで、これから自分の見たいところを明確にして、取ることができるということを言っていた。また、記録を取ることは簡単ではなく、誰しものことができることではないため、記録の取り方が

分からないことで悩んでいることはすごいことだということをお願いした。

しかし、記録で悩んでしまっている原因を同じグループの先生やファシリテーターの先生方とグループで話し合ったときに少しではあるが見つけた。それは何を見たいかが分からないのは自分の中に問がないからである。このようなことをファシリテーターの先生に言っていただき、納得してしまった。そこで自分の今の問いは何かを考えたところ、外国語の授業をさせていただいているが、どのような授業をすると英語が苦手な子どもでも楽しくできるのかを知りたいという問いであった。なぜ楽しく英語の授業を児童にしてほしいのかを無意識に表層的に説明をしてしまった。児童の様子がこうであったと自分の考えを言っているだけで実際に子どもたちから聞いたことではないためである。しかし、表層的に話をすると思ったら突然具体的に説明をすることもあるということを描き示していただいた。これは、自分の中でうまくまとまっていないということである。これから授業実践をたくさんさせていただく予定であるため、自分の問いの答えを探していきたい。

夏期集中終了後、自分の問いは外国語の授業をいかに楽しく子どもたちに受けてもらうかどうかであると気づいた。これまで取っていた記録は何も役に立たないと思っていたが、今では役に立っていると思うようになった。なぜなら、はいいいえで分かる発問が子どもたちにとって答えやすいということに気づいたからである。また、このことが分かったことで子どもたちの外国語の授業に対しての意欲に結びついていくと考える。これからははいいいえで分かる発問をたくさん投げかけていき、子どもたちからは自分は英語が好きであるということを少しでも思ってもらえるような授業を作っていきたいと思う。また、今の自分の取っている記録からどんな発問が子どもたちにとって答えやすいかだけでなく、何か違う気づきができると思うので、それを探しながらインターンに行きたい。

コミュニティで学ぶを実感

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井市安居中学校 八十川 竜馬

今年の夏期集中講義はサイクル1・2に参加し、伊那小学校「学ぶ力を育てる」と「専門職としての教師の資本」を検討した。

サイクル1はテキスト選択から1日目の話し合いまでの間、書かれていることを解読していくことで精一杯であった。しかし、話し合いの時間になって、同じグループメンバーに伝えるために言語化していく過程、加えてメンバーそれぞれの視点からの意見や解釈を受け止めていくと、一気に理解が広がって自分の中に落ちていく感覚があった。その結果、いくつかのキーワードを中心とした、本の中で私が感じ取ったことの体系化にまでたどり着くことができた。1日目で読み切れなかった部分に関しても、一度得た体系的な解釈がそのまま延長されていく感覚があり、断片的な理解にはならなかった。同じテキストを選んだ院生と解釈を突き合わせていく過程でも全体の解釈が深まったと感じる。

サイクル2は各章を通して様々な心に響いた考え方や、今まで気づいていても抽象的で言語化できていなかった部分に迫っていく瞬間があったが、全てを理解し体系的な捉えには至らなかった。ただ、サイクルの各回の最後の共有の場面で、様々な意見を吸収しながら改めて考えていくことによって、点と点が結ばれていく実感があり、内容が一気に掴めてきたように思う。それとともに、あと少し検討していかないと自分の中には落ちていかないだろうという部分が明確化していった。

今年で2回目の夏の集中講義を経験した私は、おおまかに上記のような学びを経て、去年より今年の

方がコミュニティの価値に気づけていることを実感した。去年は1日目、2日目ともに資料を読んでいくことが苦しかった印象が強い。そこから1年の間に私は様々なコミュニティに所属した(していた)ことによって、そのコミュニティから学ぶことを何度も経験することができた。そして今回の夏期集中講義でのグループも1つのコミュニティであるといえる。他の人の意見や視点に意識的にも無意識的にも触れられる環境であり、自分の考えをより深めてくれる場所だということを知っていたからこそ、今年の2サイクルは全く苦しくなかった。「難しい」「分からない」と感じたとしても、それらを対話を通してもう一度捉えていくと、1人ではなかなかたどり着けない理解や解釈にたどり着けると分かっていたからで、結果的に多くを学ぶことができていたのだと思う。

さて、最近コミュニティでの学びを実感してきている私が考えていることがある。それは金曜カンファレンスに関することである。現在進行形で私たちはカントの「啓蒙とは何か」を取り上げて検討を進めている。内容は私たちにとって非常に難解で、分からないことだらけの資料だが、ここで私は同じ院生たちに「分からない」＝「苦しい」になってほしくないと思っている。誰かが分からないと感じたものは、意外と周りも気づいていないだけで知らなかったり、分かっているつもりでも再度検討してみると新たなことが見えてきたりと、すごく価値のあるものだと思うので、なんとか「分からない」を身構えずにみんなで「楽しむ」くらいの雰囲気をつくりたい。

現場と理論を往還する

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

小林 歩実

私は昨年度福井県福井市にある、至民中学校で週に2回インターンをさせていただいた。至民中学校には、私の他にM2の学生が1人おり、夏休みには、美術の授業で「象嵌」という工芸の伝統的な装飾技法を題材に授業研究・実践をさせていただき多くの学びを学校、先生、生徒から得ることができた。また、今年度から同じ境遇の多くのインターン生がいるところで、共にインターンを行う経験をするのが良いのではないかという提案から、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程(中学校)に拠点を移しインターンを行なっている。そして、環境に慣れ始めた時に、夏期集中を迎えた。

夏期集中では、様々な先生方と出会うことができる。特に、オンラインで参加することで、県を超え、様々な学校種や役職、職種の方とお話することができるため、普段聞くことができない話から考えてもいなかった発想をもらえる時間である。個性的な先生方が集まる中で行われる対話の内容は検討文献の話から、自分の勤める学校、今課題となっている問題や悩みなど多岐に渡る。解決するというよりも自身の置かれる状況や現状を言葉にして言語化することで、問題解決への糸口が見えたり、客観的に考えるきっかけを与えられる。また、自身の実践への価値観が深まることが多く、良い出会いが多くあると感じている。

また、長い時間をかけて文献を読み検討する時間の中では、昨年からの成長も感じることができた。昨年は本の内容がとにかく難しく、意味を理解することに必死であった。理論と実践の往還は大切であると思いつつも、実践にどのように繋がってくるのか想像することは難しかった。今回は幸運にも自身がインターンをさせていただいている附属義務教育学校の文献があったことから、参観している生徒の様

子を想像しながら読むことができた。前回は感じるができなかった、生徒の活動への熱量や葛藤する姿を見ているからこそ気付いたところもあったと感じる。今回はその中でも特に印象深かったサイクル1を振り返っていかうと思う。

私は福井大学教育学部出身で、学部の際には初等教育コース(小学校免許が主免)で学び、初めての教育実習は福井大学教育学部前期課程(小学校)の1年生で授業を経験させていただいた。副免実習では公立中学校で実習を行わせていただいたため、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程を深く知る機会とはほとんどなかった。特に福井大学教育学部附属義務教育後期課程で行われているプロジェクト学習は、名称を聞いたことがある程度で、どのような実態であるのかを知る機会がなかった。今回はインターンをさせていただき、かつ今回選んだ文献にも載っている社会創生プロジェクトをインターンで参観することとなったため、その理解を深めたいと考え選択した。現在インターンで入っている後期課程の7年生(中学1年生)の3分の2は内部進学で、前期課程の授業の中で社会創生プロジェクトを経験済みである。今の7年生がどのように成長していくのか、想像しながら文献を読み進めた。

現行の社創(7年)でも、文献と同じような過程を経て、学年目標が決まった。私が参観した現7年生の様子だと、社創の時間では、どのような学年になりたいかを生徒たちが意見を出し合い、学年目標を決めるための対話を行っているようだった。その対話の中では、共通の考えとして、「責任・協力・思い・一人一人の努力」という四項目にまとめ、四項目に当てはまる言葉やフレーズをクラスごとに考案していた。「責任」は、一人一人が身の回りのことを考え行動すること、「協力」はまわりへ気配りし助け合うこ

と、「想い」は向上心を持つこと、「一人一人の努力」は、個人の努力を協力を繋げることを指す、と定義付けをしている様子であった。

これをもとに次の社創の時間では、どの言葉が相応しいか、時に批判的に賛成反対どちらの意見も大切にしながら、106人で検討を行っていた。結果、「百花繚乱」を基にした「百六花繚乱」と決まった。元になった「百花繚乱」は、多くの花が咲き乱れる様という意味であり、7年生の人数である106を入れ個性を強調したというように生徒はまとめていた。

文献を読み、様々な生徒の言葉、実践を見ていく中で、自然と普段のインターンで見ている生徒の姿を想像していた。生徒の未来の姿、現状の姿など、無意識のうちに繋げ、想像しながら読んでいたように感じる。私は美術の授業実践を通して、彼ら中学生と向き合う事になる。その為に、現場(インターン先での知見)と理論(美術・美術教育についての専門的知見)が繋がるという感覚を忘れずに、その機会を作り出していけるように努めていきたい。

夏期集中講座を振り返って

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井市明新小学校 酒井 夏瑞

夏の集中講座が終わり、早2ヶ月が経過した。集中講座で理論書と向き合い、語り合いを通して学びを深めることができた。

Cycle1では富山市堀川小学校の『生きかたが育つ授業』上巻1.2章、下巻を読み進めた。1日目に上巻を手にとったが、理論編であったためか堀川小学校の子どもたちの具体的な姿が見えず、自分の実践・経験とも繋がらず苦戦していた。同じグループの先生方から「経験に結びつけないで読むことも、経験に基づいて読むことも大切だが、今は読み進めてみては？」とアドバイスをいただき、2日目に思い切って下巻を読み進めることにした。1日目に堀川小学校の大切にしている理論が実践と結びついていることを感じたとき、2日目はより堀川小学校の「生き方が育つ授業」についてじっくり考えることができた。私がインターンで6年生とかかわっているため、下巻第3章(立場を認め合う6年生)を中心に、上巻の理論を交えながら堀川小学校の実践を読み解いていった。3日間を通して、堀川小学校の「生き方が育つ」とは何かを考えた。そして、理論と向き合ったことで堀川小学校の目指す「生きかたが育つ授業」は現在の「well-being」を主軸に置いた教育に似ているものだと感じた。インターン2年目は「子どもと子ども

のかかわり、教師の子ども同士を繋いでいく仕掛け作り、環境づくり」がみたいと思い、日々過ごしている。4月から3ヶ月半が経過したが、6年生の授業を見ていく中で「授業の中でこそ子どもたちは成長する」と改めて実感する瞬間が何度もあった。秋からは堀川小学校が大事にしている「他を契機にして自己を見直す」ことで、子どもの視点が広がっていく授業を実践していきたいと思った。

Cycle2では、コミュニティ・オブ・プラクティスを読んだ。昨年、月間カンファレンスや金曜カンファレンスで度々話題に出てくる理論書であったため、読むことを楽しみにしていた。そして、昨年よりもコミュニティに興味関心があったため、手に取ってじっくり読み進めていくことができた。振り返ると夏期集中講座は充実した時間であったと思う。私がコミュニティに興味関心を抱いたのは、3月の金曜カンファレンスの運営から、次第にコミュニティにおける自分について見つめ直す機会ができたからである。コミュニティにおける課題も見えてきた時に、自分自身がどう対処していけば、よりコミュニティが活性化されるのかわからなかった。約半年間当たり次第でぶつかってきた自分自身の実践を、もう一度捉え直したいという思いで、読み進めていった。

M2 になった今だからこそ自分ごととして理論書を読むことができた。捉え直しをして気づいたことは、自分自身がコミュニティをどう捉えているのかということや自分がコミュニティにおいてどのようなスタンスで関わっているのかということを知覚することができたということである。自覚した上で、自分自身のコミュニティへの関わり方は変えていかなければいけないと気付いた。

また、夏期集中講座で最も印象に残っていることがある。Cycle 2 の語り合いの中で「学び合うコミュニティ」について考えたことである。私自身がインタ

ーンを通して見たいものが、学級における「学び合うコミュニティ」であったため、印象に残ったのだと思う。学び合うコミュニティを作っていくためには、まず教員間でどんな子どもを育てたらいいのかを共有することから始めることが大事である。そして、授業ではどんな小さな事でも、子どもの声を拾うことを意識している、とグループの先生の話聞いた。夏休みが明けて一ヶ月経過したが、先生方と語り合ったことを意識して過ごしている。秋休み後には単元の授業をさせていただく。小学校の授業で学び合う文化を作るための工夫を模索しながら、授業実践に取り組みたい。

葛藤と納得の連続

-夏期集中講座を終えて-

ミドルリーダー養成コース1年/ 福井県立勝山高等学校

松田 奈々

大学院に入学して半年が経った。入学前から覚悟はしていたが、毎日がとても忙しかった。4年ぶりの1年担任、校務分掌の異動、教科主任、部活関連の会議や出張の増加、部活の大会に向けての練習、そして月末にある月間カンファレンスや6月のラウンドテーブル、レポート作成、スケジュール帳を開くと、休みなんてどこにあるのかと思うほど埋まっており、コロナやインフルエンザ、風邪にかかるすき間なんてどこにもないな、と感じた。いやいや、それだけ大学院での学びが、私を健康的で充実した毎日にくれてくれているのだろうと思うことにした。勤務校では夏休み中の平日に課外指導がある。顧問を担当している部活は吹奏楽部で、年に1回の大会である吹奏楽コンクールも夏休みにある。バタバタとする中、合間を縫って夏のサイクルに参加した。

夏のサイクルで推奨された書籍は何冊もあり、7月の月間カンファレンスでアナウンスされていたので、終わった後にネットで注文できそうなものを数冊準備して臨んだ。サイクル1ではその中でも、

～福井発プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち～秋田喜代美×福井大学教育学部附属義務教育学校研究会〔著〕を読むと決めた。1日目に目に止まったワードは、「モミジの葉はいつ紅葉するのか」である。読み進めると、「探究」は、大人たちは知らない学び。だからこそ協働探究できるし、必要がある。「変容」とは、瞬間はわからない。「いつのまにか」変わっている。「学び」はロングスパンであり、失敗が次に繋がる。先走らない。とあり、大学院での学びに対して、このように捉えたらいいんだよ、と私に訴えているように感じた。

「1年目の夏は『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読むことになる。」と4月の月間カンファレンスで耳にしていた。読むのにとっても時間がかかるとも聞いていたので、そのカンファレンスの帰りに注文し、5月中には読み始め、冒頭～2章あたりまではそばそばと進めていた。しかし、校務が立て込み、途中で止まっていた。サイクル2の初日に、3章から読むことを推奨すると言われ、自然と続きから読む形に

なった。同じく初日の日程確認のところで、自分の実践の学びのループ、他者の学びのループ、理論書からの学びを経て、このサイクル2を通して自分の課題を見つける目的で読んでほしいと説明があった。探究する筋がはっきりして、長期的実践をしているテキストを選んでいるため、わかりやすいはず、組織文化をどう創るか、継承するかについて、じっくり他者の探究に寄り添い読み進め、自分の実践をアップデートし、今後の参考にするようにとも説明があった。そうか、自分の実践コミュニティにあてはめて読み進めればよいのか、とわかり、なんとか読み進めることができた。気になったワードは「ナレッジ・マネジメントは人と人をつなぐこと」である。サイクル2の際のメモには、以下のように記録されていた。「人と人とのつながり、相手を大切にする、コミュニティとはどのような集まりなのか、どうやってコーディネートしていくか、という問いが自分に向けられていると感じた。自分の身の回りのコミュニティだと、クラス経営・部活動指導・職場環境など、様々あり、自分の立ち位置、関わり方に対し、どうやってコーディネートしていくか悩む。自分の行動に関して俯瞰してみる余裕があれば、適切にコーディネートできると思うが、自信はない。同僚同士の話し合いや生徒との話し合いのなかで、関わり合い方に対する難しさを経験したこともある」と。1、2日目の話し合いの場では、「経験が長くなっても、教育現場は常に変化してきているため、経験値では解決できないこともある」という話も聞き、つくづくナレッジ・マネジメントは奥が深く、難しさを感じた。サイクル2のレポートの終わりには自分自身の身近にある実践コミュニティの捉え方について悩みを綴っていた。「部活動の新体制を決める時期に来ている。2年生のリーダー決めに関して、誰がリーダーにふさわしいのか。どうやって顧問達が考えた組織案を生徒に提示しよう

か。」と。「リーダーを決めるという決め方の問題や、視点ではなく、どのようなリーダー像がいいか、事例から話し合って考えるのはどうか。そもそもリーダーはなんのために必要なのか、グループとしてのリーダーのあり方について生徒とじっくり考えてみてはどうか」とアドバイスをもらっており、サイクル2の後に実践を進めていた。正直、生徒たちの意見だけで組織のあり方を決めていいものかという気持ちの葛藤があったが、話し合いを進めていくうちに、生徒たちの鋭い視点、生徒たちが自分たちの部活動に対してどのような想いでいるのかがわかってきた。自分はコーディネーターの立場か、それとも共に活動する仲間としてコミュニティのどのグループに属しているのかを、よく考え、接することができたように感じている。新体制の役割分担、目標や今後の活動のイメージが共有できたとき、生徒たちのホッとした顔つきをみて、「なるほどな」と実感した。今後もどのように関わっていくと良いのか実践を続けたい。

サイクル3は都合により8月のお盆明けに2日間、9月の3連休初日にもう1日参加する形になった。2日目から3日目を迎えるまでにほぼ1ヶ月空くことになったが、これまでの夏のサイクルについて少し整理でき、3日連続で参加するより効果的であったように思う。3日目に参加した際、午後の報告の場で、職場改善や授業実践などについて校内で仲間を募り、働きかけて取り組んでいる様子を聞き、「どうやったらそのように活発な状態になるのか」という話になった。「勤めている現場では困り感はないのか」という言葉をかけられた。後日サイクル3のレポートを仕上げながら、「困り感はどこにあるのだろう」と考えていた。思い当たる困り感はいくつか想像がついた。「いつの間にか」変容することを期待し、実践コミュニティでの活動を続けていきたい。

私にとっての重要な転換点

ミドルリーダー養成コース1年/石川県立明和特別支援学校 東 永見

夏期集中講座が無事に終わった。私が一番印象に残っているのは、サイクル3である。サイクル1やサイクル2のように、著書を読んでレポートを書くわけではない。私にとっての重要な転換点はどこなのか、これまでの自分を辿っていく作業であった。

私は、初めて子どもとのかかわり合いについて、記録をまとめたことを転換点として書いた。その直接のきっかけは、ラウンドテーブルに初めて参加したことであった。私は、聴き手として参加した。教頭先生や中堅の先生が報告をする中で、養護教諭を目指す学生も報告をした。実習を通して感じたこと、またどういう養護教諭になりたいのかについて、自分の言葉で語っていた。私よりも経験が少ない人が懸命に語る姿を見て、自分もここで報告をしなければいけないと思った。そのためには、子どもとのかかわりを書いてまとめることが必要だった。

私にとっての重要な転換点は、養護教諭を目指す学生の報告を聴いたという出来事ではない。その出来事をきっかけに自身に起こった内面の変化、つまり「私も実践記録を書く」と決めたことが、私にとっての重要な転換点であった。初めてまとめた実践記録は、本当にお粗末なものだった。しかし、実践記録を書き続ける中で、私の実践記録は変化した。それは、私と子どもとのかかわり合いが変化しているということでもあった。

サイクル3の3日間、私はもがいた。これまでの自分を振り返り、それを受けて、自分がこれからどうしていきたいのかについて、向き合った。分かってはいたが、文字にしなくなかった思い、認めなくなかった思いにも向き合った。そして、本当はこういう風に進みたかったという思いにも気付くことができた。本当によく頑張ったと思う。

レポートが完成して、溢れ出るような達成感を感じた。今までを振り返ることで、自身が積み上げてき

た成長を感じることができた。また、自分の中に渦巻いていたものを外に出して、見つめることもできた。そんな大事なレポートは、私一人で書いたものではなかった。同じグループだった、栗原さんと目見田さんと平沢先生と前田先生と私が混ざり合ってきたものであった。栗原さんの憧れの先生への思いを聴くことができたから、自身が尊敬している先生への思いについて、離れて見ることができた。目見田さんが過去に書いたレポートを振り返って、「分かったようなふりをして書いていた」と打ち明けてくれたから、本当は表に出したくない自分の気持ちを書いてみようと思った。平沢先生が「その転換点がなかったら、東さんはどうなっていたの？」と問いかけてくれたから、自分が頑張ってきたことに気付くことができた。前田先生が、それぞれの主体性を大事にして聴き役に徹してくれたから、こんな風にそれぞれが響き合って話し合いが広がっていった。私に伝えてくれた言葉でなくても、誰かと誰かが響き合う姿を見て、心が動くことも多かった。平沢先生が、学生と同じ思いでサイクル3に臨もうと、レポートを書くことに取り組み、私たちと同じようにもがいている姿にも、私の心は動いた。そうやって、3日間の全てが私に影響し合って、このレポートができた。台風がこなかったら、対面で参加する予定だった。しかし、オンラインで参加して、このメンバーでサイクル3に臨むことができたから、このレポートを書くことができた。同じグループの皆さんと混ざり合って書いたこのレポートは、これからの私にとっての重要な転換点になった。

このレポートを書く中で、私は目標を手放すことを決めた。誰かと比べて落ち込むのではなく、これからは、自分の成長を喜び、純粋に子どもとのかかわり合いを楽しんでいきたいと思った。そして、私は、かわり手としてさらに変容する。

猛暑の夏、学びの夏

ミドルリーダー養成コース1年(1年履修)/ 福井大学教育学部附属義務教育学校前期過程

布目 康裕

私の今年の夏を一言で表すなら、「学びの夏」であった。個人的な事情で、9月まで集中サイクルが続いたが、3つのサイクルを通して、学んだことや考えたことを、Cycle1とCycle2を中心にこの機会に省察していこうと思う。

—伊那小の実践と自分の実践との往還—

私は、『学ぶ力を育てる』(伊那小学校1982.2)を読みながら、子どもと教師の視点から『学び』を捉えることにした。子どもの学びのストーリーに即した、必然性のある教科を超えた学びがすばらしかった。

子どもの視点で3つの実践の学びを捉え直した。「しゃぼん玉」の実践は、子どもたちの内から発する「知りたい、やってみたい」という求めが常にあるため、どの授業の内容も子どもたちにとって自分事になっていた。この記録の子どもたちは当時1年生。すでに自律的に学んでいることに感動した。学びの中で、子どもたちの期待感や達成感が連続することが素晴らしく、伊那小学校の子どもたちを羨ましく思う。「お店やさん」の実践での子供たちは、問題に直面した時に学びの必要性を得ていた。その問題を、乗り越え、克服したり解決したりする中に、子どもたちの学びがあると考え。個人のめあてが、協働の中でグループのめあてになり、さらには学級や学年のめあてへと交錯・連係しながら焦点化していくことも、子どもたちにとっては自然なことである。こういったプロジェクト型の学習を私自身も現任校で実践してきているが、子供たちは問題や困難に直面した時に、自分たちで合意形成を試みている。折衷案を考えるとときもあるが、そのプロセスに子どもたちの真の学びがあると実感している。「さつまいも」の実践を通して、教科・特別活動・道徳・総合的な学習の時間と、カテゴライズされるが、横断的に統合したもの

が、子どもたちをより学びに向かわせるのかもしれないと、実践記録を通して考えた。

先ほど挙げた3つの実践記録の中で、教師の立ち位置(スタンス)を考えてみた。「しゃぼん玉」の実践では、教師は、子どもたちの内から発する「知りたい、やってみたい」という求めを、問いを返したり投げかけたり、時にはゆさぶったりして、価値のある活動へと導こうとする育てる姿勢でいた。この問いが学びのたねになって、子どもたちがより学びを自分事として進めていった。「お店やさん」の実践では、教師が学びのたねを子供たちに届けたが、子どもたちも同じ思いで学習にのめり込んでいった。しいたけ販売の準備で直面した子どもたちの課題に対して、教師がどうかかわるとよいか、そのタイミングと度合いを鑑みていた。これを効果的なものにするには、教師が子どもたちを見取ることが重要だと考える。しいたけの原木という学びのたねと子どもたちの期待感、これまで積み上げてきたごっこ遊びの経験、これに見取りの中で生かされる教師の助力を加えると、学びのプロセスが創り上げられるのではないだろうか。「さつまいも」の実践では、創造が得意な瑞穂が計算で四苦八苦するとき、どう教師が手立てを講じるかが重要になる。どのタイミングで声をかけるかで、瑞穂のモチベーションを左右しかねない。子どもの心の動きを捉えるために、見取ることができる教師であるべきだと改めて思った。

伊那小学校のようなプロジェクト型学習は、今日多くの学校で実践されている。その中で、教師としてどのように学びを捉えるかが重要になる。生活の中に学びの芽はあるが、その中で教師は学習になり得るものかという意識を働かせている。この記録では、学習になり得るものを次の4点でまとめている。

- 1) 子供たちに共通の関心事であり、わくわくするものであるか
- 2) 「こうしたい」という求めが生まれ、めあてとなって連続する見通しがあるか
- 3) どの子にとっても可能で、やりがいのあるものか
- 4) 学力を身に着けることになるか

どの子にも学びの芽が芽生えるようにするために、教師ができること、伊那小学校の先生方がしていることは何だろうか。

まず、伊那小学校の先生方が大事にしていることは、教師がいかに子どもの能力や子供の動きを捉えているか、いかに素材(学びのたね)のもつ構造を捉えるかである。普段の見取りの積み重ねや教材研究(伊那小学校では、素材研究・学習材研究)の充実が、授業の構想をより豊かにするのだろう。しかし、その構想に捉われず、構想を描きつつも、学習の実際に即して絶えず新しい構想をアップグレードすることを心掛けているようだ。私自身も、「授業はLIVE(ライブ)」と思って実践している。子どもの反応によって構想通りにいかないこともある。その一瞬一瞬の判断で、巧みに発問を変えたり、子どもたちを揺さぶってみたりする。子どもたちがめあてをもつまでじっくり待つことを恐れず、子どもの興味・関心を見極めて、子どもが求めるものを学びにつなげていく。そこに面白さを感じている。

—改めて見つめる「省察」—

ドナルド・A・ショーンの『省察的实践者の教育プロフェッショナル・スクールの実践と理論』。今まで読んだ本の中で、最難解であった。しかし、実践と照らし合わせることで、少しずつ理解できるようになった。

ショーンが唱える省察の重要性は、100%とはいかないが、再認識することができた。Cycle2の最初に抱いた「省察と振り返りの違いは?」、「省察するタイミングは?」、「誰のために?」の問いの答えも少し見えてきた。

まず、「省察と振り返りの違い」は、自分のこれまでと結びつけたものかどうかではないだろうか。振り返りは、やや結果重視の観点が見受けられる。子供たちの残す記録やつぶやきと比べてもそうである。しかし、省察は、これまでの学びや経験を踏まえて、それらが結果や自分の今にどう結びつきどう働いたから今に至るかを述べるものではないだろうか。本書では、1対1のやり取りの場面がほとんどであったが、学校では、子供1人に何人もの子供たちが繋がる。時には協働の中にヒントがあり、個人の学びを促進させることもある。本書の第10章では、省察の言語化の良さが次のように述べられている。

- ・言葉に表すことで、学習が促進される。
- ・学生が直面している困り感を言葉にできる。
- ・知ったことを述べる。
- ・指導者が示すことや語るることについて、どのように捉えたかを語る。

次に「省察するタイミング」についてだが、私自身は、省察のことを知ったころは、単元の最後にしか省察の時間を作っていなかった。しかし、私は6年生で今年度行った実践では、ポイントポイントで省察の時間をとった。改めてこの違いを、本書を読んで考えてみると、私の実践では、子供たちにとって予想外のことがあった時にも省察の時間をとっていた。子供たちの学びのストーリーの中に組み込むことで、子供たちの率直なつぶやきや疑問を知ることができ、学びに繋げることができた。また、省察するタイミングを細分化すると、事後に静かに行う、活動の最中に全体を止めて行う、活動の最中に活動の中で行う、と本書では述べられている。やはり、学びの文脈の中で行うことで、最適な効果がある。

最後に「誰のための省察」か。教師のためでもあり、子供たちのためでもある。プロジェクト型の学習において、教師が多様なアプローチで主題に迫る子供たちと、対話を通して相違点と出会い、時には共に比較・検証を行っていく。そのプロセスの中で、教師が省察をかけていくことができる。そこでの省察から、子供たちは自分と比較しながら自問することにもなる。

省察を通して、子供たちや教師の学びの現状や、学びの展望を知ることができるすばらしさを、改めて学んだ。私自身、「発信」を実践研究の軸に据えて取り組んでいる。省察も、自分から自分に発信するも

のである。生活の中で出会った疑問を、自分で時には協働で解明し、そこから新たな学びを見つけ、学び続ける子供、学んだことや困り感を表現できる子供を育てたい。

Embracing Diversity and Learning from It

ミドルリーダー養成コース2年/ 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

ANUNIWAT DHANACHAT

Over the course of nearly three years (including research student period) at the University of Fukui, with a particular focus on the Department of Professional Development for Teachers (DPDT), time has passed more swiftly than anticipated. This institution has provided me with a unique opportunity to immerse myself in authentic Japanese teacher training methodologies, including Lesson Study and various others. Through this experience, I have gained a multitude of fresh insights into teacher education, with a specific emphasis on mathematics teacher education and mathematics education. These insights are not only relevant on an international scale but also encompass distinctive practices that warrant global dissemination. Consequently, I continually find myself eagerly anticipating the unknown when embarking on school internships and educational visits. These experiences serve as a constant source of excitement, offering valuable opportunities to expand my horizons and verticals and contribute to the broader discourse in the field of education.

Annually, during the Summer Intensive (SI) program, the DPDT provides various opportunities for teachers with diverse teaching backgrounds, professional trajectories, and subject expertise to engage in discussions, share insights, and engage in collaborative learning. These diversities foster a

broader perspective, extending beyond the confines of our daily routines. During SI, participants were assigned readings tailored to their respective courses and interests in future reflective practice. Subsequent to reading these materials, participants convened to exchange insights and discuss what they gleaned from their chosen readings. It became evident that, even when multiple individuals read the same book, their perspectives, and takeaways varied considerably. These divergent viewpoints offered valuable insights, prompting introspection regarding the limitations in one's own understanding and highlighting aspects to consider when approaching future readings. i.e., I myself major in mathematics education, and when I engage in reading, my primary focus lies on the content of *practice records* – the records of document studies or research pertaining to teaching practices, which are conducted independently or by teacher associations with the goal of enhancing teaching and provide detailed descriptions of classroom events and interactions observed from a first-person perspective offering insights into student learning experiences and how teachers address them – Conversely, others prioritize aspects related to classroom and curriculum management, with a particular emphasis on achieving and illustrating specific pedagogical practices. These diverse perspectives foster an abundant learning

environment, allowing me to glean insights from various vantage points.

Integrating my practical experiences from educational institutions into written records or practice documentation has proven to be one of the most formidable challenges along my learning journey. As I delved into Cycle 3, I encountered a scenario where I possessed a solid grasp of my accomplishments, but I struggled to articulate my thoughts and experiences in writing effectively. Furthermore, the writing style these documents necessitate diverges significantly from my prior experience, which primarily involved straightforward chronological event descriptions. In contrast, these writings demand a more narrative and narrative analysis. Thanks to, the heterogeneous group of individuals who offer diverse perspectives and engage

in mutual feedback has significantly contributed to the improvement of my practice record writing. This collaborative and varied approach has been instrumental in enhancing the quality of my written work.

In conclusion, my educational journey at the DPDT has not only encompassed the SI also introduced me to various distinctive learning approaches, enriching my professional development comprehensively. These diverse educational experiences have emerged as a central catalyst for learning, particularly for students like me. The presence of such diversities has facilitated an effective intervention for personal growth. Through exposure to these diverse perspectives, I have found it easier to reflect on my own learning process and uncover previously unnoticed insights and perspectives.

(以下、機械翻訳をかけて字句を一部修正したものを参考までに掲載します。文責は編集部にあります。)

多様性を受け入れ、そこから学ぶ

福井大学での約3年間（研究生期間を含む）、特に連合教職開発研究科（DPDT）を中心に、時間は予想以上に早く過ぎていきました。福井大学では、授業研究をはじめとする様々な本格的な日本の教員養成の方法論に触れるまたとない機会を与えていただきました。この経験を通して、私は教師教育、特に数学教師教育や数学教育について多くの新鮮な洞察を得ることができました。これらの見識は、国際的な規模で通用するだけでなく、世界的な普及に値する特徴的な実践を包含しています。その結果、私は学校インターンシップや教育視察に出かける際、常に未知への期待に胸を膨らませています。このような経験は常に興奮の源であり、自分の視野を広げ、教育分野におけるより広範な言説に貢献する貴重な機会を与えてくれています。

毎年、DPDTはサマー・インテンシブ（SI）プログラム（夏期集中講座）の中で、多様な指導経歴、専門的な経歴、教科の専門性を持つ教師たちと、ディスカッションを行い、見識を共有し、共同学習を行う様々な機会を提供してくれます。こうした多様性により、日常の枠を超えた広い視野が育まれます。SIの期間中、参加者はそれぞれのコースや今後のリフレクティブ・プラクティスへの関心に合わせたリーディングを割り当てられます。これらの資料を読んだ後、参加者は集まり、選んだ本から得た洞察を交換し、議論します。その結果、複数の参加者が同じ本を読んだとしても、その視点や収穫はかなり異なることが明らかになります。これらの異なる視点は貴重な洞察を提供し、自分自身の理解の限界に関する内省を促し、今後読書に取り組む際に考慮すべき点を浮き彫りにします。例えば、私自身は数学教育を専攻しており、読書に取り組む際、実践記録の内容に主眼を置いています。実践記録とは、教育実践に関連する文書調査や研究の記録であり、教育を向上させる目的で独自に、あるいは教師団体によって実施され、生徒の学習経験や教師がそれらにどのように対処するかについての洞察を提供するものであり、一人称の視点から観察された教室での出来事や相互作用の詳細な

記述を提供するものです。こうした多様な視点が豊かな学習環境を育み、私はさまざまな視点から洞察を得ることができるのです。

教育機関での実践経験を文書記録や実践文書に統合することは、私の学びの旅路において最も手ごわい課題のひとつです。第3サイクルに入ると、自分の業績をしっかり把握しているにもかかわらず、自分の考えや経験を効果的に文章化するのに苦労する場面に出くわしました。さらに、これらの文書で必要とされる書き方は、主に出来事を時系列で記述していた私のこれまでの経験とは大きく異なっています。対照的に、これらの文書では、より物語的でストーリー性のある分析が求められます。多様な視点を提供し、相互フィードバックを行う異質なグループのおかげで、私の実践記録執筆の改善に大きく貢献しています。この協力的で多様なアプローチは、私の執筆作品の質を高めるのに役立っていると感じています。

結論として、DPDTでの私の教育の旅は、SIを網羅するだけでなく、様々な特徴的な学習アプローチを紹介し、私の専門的な成長を包括的に豊かにしてくれました。また、このような多様な教育経験は、特に私のような学生にとって、学習の中心的な触媒の役目を果たしました。さらに、このような多様性の存在は、自己成長のための効果的な介入を促しました。その結果、このような多様な視点に触れることで、自分自身の学習プロセスを振り返ることが容易になり、以前は気づけなかった洞察や視点を発見することができたのです。

Intensive Summer Cycles

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立高志中学校

Nathaniel Venezuela Teocson

“It’s a break for the students, not for the teachers.”
This is the harsh reality for teachers.

Leading up to the summer break, we are provided a document with a detailed outline of the schedule for each of the three “Cycles”. Within this document are several articles embedded throughout, relating to the university’s philosophy on teaching and education. What I found curious was that this 9-day session, split into three 3-day sessions spread across July and August, is referred to as the “Summer Cycles”. Whereas the literal translation of what it is referred to in Japanese (“夏期集中講座”) is “summer intensive course”. The term “intensive” can surely seem intimidating, but why leave it out? It is to make these summer sessions more approachable for the foreign students? How intense does it actually get?

The general task for Cycle 1 and Cycle 2 is to choose a text from a selection of books and articles curated by the university, ponder on its content, reflect on

how it relates to our own teaching practice, organize our thoughts in writing, and then share our report within a small group of colleagues during the third day of the Cycle.

In Cycle 3, we were to reflect on our own cumulative experiences and knowledge, including those gained through Cycles 1 and 2, and discuss our thoughts at the end of the final day of these Cycles.

For me, what left the biggest impact was during Cycle 2. I chose to read *Professional Capital: Transforming Teaching in Every School* by Andy Hargreaves and Michael Fullan. “Capital” itself is defined as “relating to or being assets that add to long-term net worth”, according to Merriam-Webster dictionary. Hargreaves and Fullan draw a distinction between two types of capital: *business capital* and *professional capital*.

The concept of *business capital* views teaching as technically simple, and being a good teacher comes down to enthusiasm, hard work, raw talent, and measurable results. On the other hand, *professional capital* views teaching as difficult and sophisticated, which means it requires continuous training and high levels of education.

Reading this book helped reaffirm my decision to enter this graduate program. In line with what I have been learning, to become a great and capable teacher, it is essential to be deliberate in your practice. It is not enough to be passionate about teaching. With continuous training and education, us educators can develop our capabilities and effectiveness.

As with every conference at this university, these Cycles offer an opportunity, and more importantly,

(以下、同様に機械翻訳をかけて字句を一部修正したものです。文責は編集部にあります。)

the time to examine my own practice critically from a variety of perspectives; it was the ideas I was exposed to through the readings, and the opinions and stories from my colleagues during discussions, through which I could gain these different perspectives. Ultimately, the intensity of these Cycles and the resulting capital to gain is completely up to you.

With half a year to go before I am scheduled to complete this program, I am not yet at a point where I can confidently assert the quality of my Long-Term Practice Record. Regardless, I will press on and continue to fulfill both personal and professional obligations to the best of my abilities, towards the end of and beyond my graduating year, through the entirety of my teaching career.

夏の集中サイクル

“生徒のための休みであって、教師のための休みではない”。これが教師にとっての厳しい現実である。

夏休みに入る前に、3つの「サイクル」それぞれのスケジュールの詳細な概要が書かれた文書が配られる。この資料の中には、大学の教育哲学に関連する記事がいくつも埋め込まれている。私が不思議に思ったのは、この9日間のセッションが、7月と8月にまたがる3日間の3つのセッションに分割され、「サマー・サイクル」と呼ばれていることだ。日本語に直訳すると「夏期集中講座」である。留学生にとって親しみやすい夏期講習にするためだろうか。実際、どの程度集中するのだろうか？

第1サイクルと第2サイクルの一般的な課題は、大学が提示した書籍や論文の中からテキストを選び、その内容について熟考し、自分の教育実践との関連について考え、考えを文章にまとめ、サイクルの3日目に少人数の同僚グループ内でレポートを共有することである。

第3サイクルでは、第1サイクルと第2サイクルで得たものを含め、自分たちが積み重ねてきた経験と知識を振り返り、最終日の終わりに自分たちの考えを話し合うことになった。

私にとって、最も大きなインパクトを残したのは第2サイクルだった。私は『プロフェッショナル・キャピタル』を選んだ：アンディ・ハーグリーブスとマイケル・フーランの共著である。Merriam-Websterの辞書によれば、「資本」そのものは「長期的な純資産を増加させる資産に関連する、または資産である」と定義されている。HargreavesとFullanは、ビジネス資本とプロフェッショナル資本という2種類の資本を区別している。

ビジネス・キャピタルの概念では、教えることは技術的に単純なことであり、良い教師であるためには、熱意、勤勉さ、生の才能、そして測定可能な結果が必要であると考え。一方、プロフェッショナル・キャピタルは、教えることは難しく洗練されたものであり、継続的な訓練と高度な教育が必要であると考え。

本書を読んで、私はこの大学院課程で学ぶ決意を新たにしました。私が学んできたことと一致するのは、優れた有能な教師になるためには、意図的に実践することが不可欠だということだ。教えることに情熱を持っているだけでは十分ではなく、継続的なトレーニングと教育によって、私たち教育者はその能力と効果を高めることができるのである。

本学での毎月のカンファレンスと同様、このサイクルは、自分自身の実践をさまざまな視点から批判的に検討する機会、そしてより重要な時間を提供してくれる。リーディングを通して触れたアイデアや、ディスカッション中の同僚の意見や話を通して、私はこのようなさまざまな視点を得ることができた。最終的に、このサイクルの深さとその結果得られる資本は、完全に自分次第である。

このプログラムを修了するまであと半年、私はまだ自分の長期実践記録の質を自信を持って断言できる段階にはない。とはいえ、私は邁進し、修了年度の終わり、そしてそれ以降も、教師としてのキャリア全体を通じて、個人的な義務も仕事上の義務も精一杯果たし続けるつもりだ。

2度目の夏期集中

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 福井県立藤島高等学校 鈴木 聡史

今年は暑さが大変長引き、急に秋の涼しさを感じるようになった10月初旬となりました。夏期集中のレポートを書くには良い季候となりましたが、いささか時間が経ってしまいました。

しかしながら、今年の夏は個人的に大変充実していました。7月から週末には夏期集中が3回入り、娘の個人探究活動で韓国に同行し、日米教員交流という事業でアメリカへと4泊6日の弾丸研修にも参加させていただき、お盆休み1日のみで学校祭準備期間に入り、8月は終わっていきました。学校とは別の場所で様々なことに触れること（異国の教育施設を見たり、異国の文化に触れたり、異国・他県の先生方と交流して教育観に触れたり、他校種の先生方の実践に触れたり等々）は、それはそれで大変新鮮で、刺激的で、自分の肥やしになっているなど感じています。今年の夏は本当に良い夏でした。

さて、本題ですが、個人的に教職大学院の夏期集中は最も過酷で、自分に負荷をかけていただける活動だなと感じています。筋肉もそうですが、成長にとって負荷は欠かせないものなのでしょう。そんな経験をさせていただけることを大変有り難く思っています。

右も左も分からないまま迎えた昨年の夏期集中は、読書や要約に慣れない私にとって大変苦勞した夏で

した。1年目といえば、『コミュニティ・オブ・プラクティス』。理論書には読み進める中で多くの見慣れない言葉が出てくるし、言葉の定義も確認しなければならないし、数百ページある文章を読んでいく内に前に読んでいたことを忘れていくからまた戻らなければならないし、私にとって苦勞が絶えません。さらに全体を読んでから、筆者がどのように探究を進めていったのか、著書にどのように構成しているのかをつかむというオーダーも入ってきます。とてもではないが私の読書では3日間で事足りることもなく、時間を追加しながら全体を読みこなし、何とかレポートに仕上げ、3回のCycleを通して現状分析と課題を洗い出し、自らの探究に繋げていくことを検討していきました。大変苦勞したものの、現在私が取り組んでいるコミュニティ「すずかけ AGORA」のヒントになることが大変多く、『コミュニティ・オブ・プラクティス』を参考に勤務校でのコミュニティ作りを始めることができました。

そして、ある程度の覚悟を持って迎えたこの夏でした。今回の読書はいくつか選択の余地があり、初めは7月のカンファレンスで触れた『The Principal』と関わっている『専門職としての教師の資本』を読もうと考えていましたが、どこかから『専門職としての

教師の資本』は読みやすいからいつでも読めるし、時間をかける夏にしか読めない難しい本の方が良いのでは？という声が聞こえてきて『学習する組織』を読むことにしました。

昨年の経験を踏まえ、今年は前もってフライング読書を始め、気になった部分をすぐに見返すことができるように付箋にメモ書きして該当ページに貼り、付箋をもとにキーワードを文字に起こしていくことを平行して読書していきました。そうすると、日々のカンファレンスでグループの方々に伝える内容も整理しやすくなりましたし、何より自分の頭の中の整理が付きやすくなりました。さらに、章のタイトルを書きつつキーワードと内容を羅列していくことで章ごとに要約をつかむことができ、全体も見渡すことができるようになりました。いろいろと運営してい

ただいている側の意図とは外れている部分があるかも知れませんが、今年は昨年よりも上手く乗り切ることができた気がしています。

理論書を読み、現状抱えている課題を考えて実践し、実践を省察して改善して、また実践していくという探究の繰り返しは、まさに高校で導入された総合的な探究の時間そのもので、我々教員も同様に探究していく中で主体的に学んでいく姿勢が重要だと思っています。教職大学院で行っていくこの過程は私にとって非常に有意義で、学校にとっても大変重要な活動だと確信しています。この夏でつかんだ課題や視点を秋からの実践や今後続いていく実践に生かして、学び続けることができる教員でありたいと思っています。長期実践報告に向けてのスパート頑張りましょう！！

夏期集中講座の学びをつなげる

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/南越前町立南越前中学校 山本 亮二

教員にとっての夏季休業とは、ワークライフバランスをとることのできる貴重な期間であり、心身ともにリフレッシュすることで、2学期以降の英気を蓄える時期でもある。ようやく夏休みかと、胸をなでおろすはずであるが、教職大学院生である私は、今年もこの時期が来たかと、目に見えないプレッシャーを感じながら、何かに追われる日々となる(恐らく、現職院生である先生方は似たような思いを抱いている方も多いはず...)。しかし、この焦燥感は一歩プレッシャーでもあり、同じ志を持った仲間と対話することで、明日への活力となり高いモチベーションを保つ契機となる。また、カンファレンスを通して様々なメンバーと対話を重ねることで、自分では気づかなかった視点で考え直したり、学び直したりすることができる。現に昨年度も、院生の必読書である「コミュニティ・オブ・プラクティス」に触れ、当初は「どういう意味だろう」と頭を悩ませたものである。しかし、読後のカンファレンスにより、「そういう風に解釈すればよいのか」、「この理論を現場では、こ

のように結びつけていけばよいのか」などとスッと視界が晴れたように理解できる瞬間がおとずれた。これこそが夏期集中講座の醍醐味であり、自分の成長を肌で感じることでできる瞬間である。そういう意味でも、今年の講座は昨年度よりもワクワクした面持ちであり、どのような学びができるかなとポジティブな気持ちで臨むことができた。

今年度、読んでみたいと思った書籍は、斎藤 喜博『学校づくりの記』とピーター・M・センゲ『学習する組織』である。どちらも著名な本であるが、開校2年目の本校にとっては、道標となることが散りばめられた書籍に違いないと感じ、読み進めた。現在、新しい学校づくりに取り組んでいる本校であるが、斎藤氏の学校改革から見えてきたこととしては、以下の点があげられる。「地域とどのように連携していくか」である。斎藤氏の実践の中で、最もすごいと感じたことは、村・地域と一体となって教育改革を行っていることである。学校や子どもに対しての改革ならば、現実的であり現段階で取り組めるところから進

めていけば良いのであるが、これが地域と連携した教育改革となると、どこから手をつけ、どのような構想・計画で進めていけば良いのか途方に暮れてしまうのが、普通の教員であると思う。しかし、それを長期的な視点で、少しずつ保護者や地域の人との関わりをもちながら、見事に推し進めている点は驚愕である。本校は3地区からなり、それぞれの地区に素晴らしい文化や歴史がある。これらをどのようにして教育活動に取り入れていくのか、また地域の文化を支えている方々とどのように連携していくのか、まだまだ課題は多い。そのためにも、先生同士だけでなく、保護者との対話の時間、地域の方々と対話の時間を設けることは必要であるし、先生自身も地域の活動に飛び込んで行ったり、地域の文化に触れたりすることが必要なのではと感じる。斎藤氏の言葉である「校長が変わろうが、職員が変わろうが、どんな校長や職員が来ようが、この村の学校の教育は、この村のものなのだから、村の住民自身の力で育てていく」と言える学校文化の創造を目指したい。

『学習する組織』では、改めて「教職員の協働体制をいかにして構築していくか」についての重要性を考えさせられた。本校では、学校の課題を共有し、その課題解決のために3つの柱となる実践コミュニティ（①授業改善 ②ふるさと教育 ③生徒支援教育）を創設した。これを元に、カンファレンスを行い実践に取り組んでいるが、決められた時間以外での、自主的な教職員間の対話の時間は少ないように感じる。学校全体で問題を共有し解決する姿勢を持つことの

大切さを感じるとともに、それを個人の問題として捉えるのではなく、全体の問題として考え、1人1人が当事者意識を持ちながら対話していくことが大切である。もちろん多忙化や働き方改革による退勤時間の設定などの影響もあると思われるが、まだ対話して協働していくという文化が成熟していない証拠である。この課題解決のために、これからも定期的なカンファレンスを継続していくこと、そして、そこで話し合われる内容は、現在の学校や子ども、先生方が抱える課題であることが必須であろう。これから先も、全体を見通すシステム思考を意識し、課題の背景にある部分にまで目を向け、チーム学習による課題解決を目指していきたい。

Cycle 3では、上述した2点をふまえながら、今後の長期実践をどのように組み立てていくと良いのかについて考えた。まだ、構想の途中ではあるがCycle 1・2での学びは、自分が理論と実践を往還し、実践を省察しながら書きしめしていくうえで指針となるものでもある。これまでの実践の事実や考察を、どのようにストーリーとしてつなぎ、そのように考えるに至った転換期はどこにあったかを紐解きながら記録にしたいと考える。そして、この記録に書かれている実践が、学校創成期のどのような状況から生まれ、どのように展開していったのかを読み手に伝わるように書き留めたい。

残り数か月となってきたが、今後も教職大学院での学びを楽しみながら、協働による学校改革をさらに推し進めていきたいと改めて感じる学びとなった。

夏期集中サイクルからの学び

学校改革マネジメントコース2年/ 宮古島市教育委員会 砂川 誠

夏期集中Cycle 1～3を通して、子ども達の学びと教師の学び、そして、自分が教師として何を大切にしてきたかについて、あらためて問い直す機会となりました。

Cycle 1では、伊那小学校の実践記録「学ぶ力を育てる」を読みました。その中で「学力」とは何かについて再度、確認することができました。私は、これまで、小学校の教員として勤めてきたので、伊那小学校

で学ぶ子ども達の様子が目に浮かぶと同時に、40年前の記録である本書の記述が、現行の学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」につながることに驚きました。そして、実践記録の子ども達が生き生きと学ぶ姿とその学びを支える教師の姿から、「学ぶ力」を身に付けることで、子ども達が獲得する「どのような環境にいても自立的に自己を形成していく『生きる力』」こそが、本当の意味での「学力」であると捉えることができました。これからも「学ぶとはどういうことか」について子ども達の学びの姿から語り、そして「子ども達の学びを支える教師の姿とは」について問い続けていくことを大切にしていきたいと思いました。

Cycle2では、「専門職としての教師の資本（アンディ・ハーブリーブス マイケル・フラン）」について検討しました。本書では、「人的資本（潜在的能力）」「社会関係資本（同僚性）」「意思決定資本（自律性）」がキーワードとして取り上げられており、その関係性について「『社会関係資本（同僚性）』の中で、それぞれの教師の『人的資本（潜在的能力）』が磨かれ、同僚との関係の中で『意思決定資本（自律性）：専門職としての判断力』が育まれていく」としています。つまり、同僚性（教師の協働）の中で、教師が学ぶことが、教師の成長を促していくのだと捉えました。学校にコミュニティの構築に向けた取組を進めていく事は、本書の多くの事例が示すように、教師のモチベーション・能力の向上につながり、子ども達の学びを保障することにつながると考えました。

「教職は、子ども達を楽しませたいだけの教室へ誘うものであり、生活の余白に彩りをもたらす様々な興味関心を子ども達へ届けるものである。教職は、子ども達が生活につまずいている際に、子ども達の背中をしっかりと支えるものである。」

子ども達の学びと育ちを支えるために「専門職としての教師の資本」への投資について考え、実践していく必要があると考えています。

Cycle3では、これまでの自分自身の実践について振り返り、記録化していきました。「管理職として学校組織のマネジメントを学びたい」というのが直接の大学院進学のかっけだったので、これまでは、管理職になってからの実践について考える機会が多かったのですが、Cycle1で伊那小学校の実践記録を読むことが、教諭の際の実践について振り返ることにつながりました。採用5年目の頃、学習指導要領の改訂により「総合的な学習の時間」が導入されることになりました。「子ども達と一緒に楽しいことができそうだ」と考え、例えば「追い込み漁をして、捕った魚で地元のカマボコづくりをする」などの実践を行いました。ところで、伊那小学校には学習成立の4観点というものがありますが、その中の一つの観点「そのたね（素材）が子どもたちにとって共通の関心事に属しているか、その関心も頭だけのものではなく、子どもたちの胸をときめかすようなものであるか」だけは、成立していたと考えています（他の観点については、学習を組織するという意識が薄かったので全く自信はないのですが・・・）。それは、子ども達だけでなく、自分自身（教師）も胸をときめかし、学習を楽しむことができたからです。

これまで、私は、「子供と一緒に楽しむ」ということを大切にしてきたように思います。そして、その視点は、今の学校現場の現状をみるととても大切なように感じています。「子どもも教師もともに楽しく学べる学校づくり」について、大学院での学びを生かしていきたいと考えています。



My Opinion

教職大学院には、教員や院生を始め、多様な人々が関わっています。そんな多様な方々の「一言」を紹介する場として新しいコーナーを立ち上げました。トップバッターは、永らく教職大学院の運営に携わってこられた松田先生です。今後も様々な立場の方々の「一言（主張、意見、提案など）」をお待ちしています。

トップダウンとボトムアップ

—多様性に富む院生の学びに伴走して—

福井大学連合教職大学院客員教授 松田 通彦

連合教職大学院の古参スタッフの1人として、異コース、異地域、異校種、異年齢等、多様な院生たちの学びに伴走し続けて久しい。なかんずく、月間カンファレンスや夏期・冬期集中講座のグループセッションで展開される個別具体的教育実践の報告と傾聴は、まさに教師の実践的指導力の向上をコンセプトとする教職大学院の授業の醍醐味とも言えるものである。

こうしたルーティンワークに携わる大学人としての私のスタンスは、諸氏のパフォーマンスをコーディネート（まとめ・総括）するのではなく、ファシリテイト（傾聴・鼓舞）することを首尾一貫としている。自分自身、長きに亘る教員（管理職）生活において多くの知識や経験を蓄えてきたはずと自負してはいるものの、若きスクールリーダーたちの熱き教育愛、子ども愛に裏づけられた主体的・献身的な教育実践の様を共有するとき、学ぶこと多々ありというのも事実である。教師冥利に浸りながらやりがいと生きがいを感じる毎日である。

ところで、院生の皆さんの学校改革、組織マネジメントに係る基本的考え方や意識の深層構造に関して、最近気になることが1つある。それは、極論すれば、「リーダーが組織をマネジメントする際、トップダウンではなくボトムアップでなければならない」という彼らなりの信じて疑わない定理である。具体例を挙げれば枚挙に暇がないが、共通しているのは、

「トップリーダー（校長）が強いリーダーシップを発揮しても、スタッフ（教職員）の内発的なやる気・意欲が喚起されなければ健全な組織とは言えない。換言すれば、スタッフ個々の積極的な思いや意向を丁寧に吸い上げていくようなボトムアップ方式でないと組織は上手くマネジメントされない」というものである。彼らの主張はあながち間違っているとは思わないが、トップダウン方式の組織マネジメントは、全くダメであるかのようなネガティブな印象が強く持たれていることに多少の違和感を覚えている。

福井大学連合教職大学院のカリキュラムは多岐にわたっている。夏期集中講座期間中に読み解かねばならない県内外の優れた教育実践記録やウェンガー、ハーグリーブス、シャイン等が著す難解な理論書への挑戦は1つの大きな山場である。誤解なきように願いたい、このような論文や書籍には、協働し実践するコミュニティの大切さ、教師が自律するために必要な資質能力、組織文化とリーダーシップ論等、実に多くの学びの資本が包摂されている。こうしたテキストを紐解きながら、自身の実践を理論化することも院生には要求されているのだが、先述のマネジメントのとらえ方には、院生自身の職場での不満や苛立ち、それとも逆に、確信が反映されているのだろうか？私自身、首を傾げたくなる瞬間が少なくないのである。

一方で、院生諸君の実践発表を共有する場面では、私自身もはるか昔の自らの教育実践を振り返りつつ、当時の考え方や行動を省察することがよくある。このトップダウンとボトムアップの問題もそのうちの1つである。結論から先に申し上げれば、何事もケースバイケースで柔軟に対応しなければならないということに尽きるが、私の場合、高校の校長としてまた福井県の教育行政機関の幹部職員として、トップダウンで事を進めてきたことが少なからずあったように思う。ただ、その際、今顧みるに、一端の信念のようなものがあったようにも記憶している。

近江商人が培ってきた商いの精神に「三方（さんぼう）良し」という理念がある。つまり、「商売というのは、お客様と売り手と世間様のいずれもが満足するものでなければならない」というのは良く知られた経営哲学であるが、私は、これを学校や行政機関の組織に応用して考えていた。つまり、三方というのは、子どもたち、教職員、そして保護者・地域社会であって、それぞれが納得するような環境整備が必要不可欠であるというものである。ただ、実際のところ、現実問題としては、三者が同等に、同じ質量で満足することがいつも担保されているわけではなく、当然のことながらそこにはプライオリティが存在する。私にとっての最優先順位は子どもたちであって、学校の主役である子どもたちの最大幸福をまずもって念頭に置けば、教職員というのは次の順位になってしまうのである。具体的事例の紹介はあえて避けるが、学校としての方向性、県全体としての教育の将来的展望を考えたとき、子どもたちがより良い環境でより良い教育を享受するための最善の策は何かが常

に意識下にあった。教職員の皆さんと意見・見解を異にする案件もあったのだが、自分の存念を伝え、決断し、悩みつつも、気心知れた同志の支えに勇気づけられながら行動したことも時としてあったのである。

10年以上も前の話を引き合いに出すのは潔しとしないが、少なくとも、私の関わった事例については、その後の状況や塩梅を鑑みるに、当時の判断が本質的に間違っていたとは思っていない。いささか独りよがりとの責めは受けるかもしれないが……。要は、ステレオタイプ、型通りのマネジメントではなく、時と場合を考慮しつつ、フレキシブルな対応が組織運営には肝となるということである。トップダウンもボトムアップも、所詮は1つの手段に過ぎないのではないだろうか。

日本人は熱しやすく冷めやすい。世の中の流れに遅れまいと、その時々々の価値観や思想を効率よく迅速に掌握し、敏感に反応することは決して悪くはないけれども、先行き不透明で変化の激しいVUCAの時代においては、常に泰然自若、臨機応変を旨として事に臨む必要がある。自分自身の生き方・在り方としての座標軸をぐらつかせては本末転倒であるが、柔軟に、バランスを意識しながらの組織のやりくりが最も望まれるところである。また、多様性溢れる現代社会にあって、今ほど柔軟性の大切さが叫ばれるときも他にない。組織マネジメントや学校改革に関して、それぞれの立場で学びと知見を深める院生諸氏にさりげなく伴走し、多少煙たがられながらも本音トークを介しつつ、教育の現状と今日的課題に真摯に向き合っていきたいと心に念ずる日常である。

福井大学連合教職大学院 入試説明会

令和5年

※オンラインにより開催します。

12/17 日 13:00-

教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

13:00からの全体説明のあと、
概ね14:00から個別相談となります。

●オンライン（Zoom利用）

学生募集日程（一般選抜）

令和6年度 第1回募集

出願期間：令和6年1月15日(月)～19日(金)
試験日：令和6年2月3日(土)
合格発表：令和6年2月14日(水)

令和6年度 第2回募集

出願期間：令和6年2月15日(木)～21日(水)
試験日：令和6年3月2日(土)
合格発表：令和6年3月14日(木)



過去問を
入手できま
す。

募集要項を
入手できま
す！

出願を考えている方、関心のある方は、
お気軽にご参加ください。

※参加希望の方は、以下のURL又はQRコードから申
し込んでください。

<https://www.ocans.jp/u-fukui?fid=FCLWXat7>

申込受付期間
令和5年10月2日(月)～12月8日(金)



教員免許取得プログラム

（推薦選抜を除く）

授業研究・教職専門性開発コースの入学者で、教
職に対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、
高等学校（取得出来ない免許もあります。）又は特
別支援学校の教育免許取得の道を拓くものです。

授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割
納入することになります。

福井大学学務部入試課

電話番号 → 0776-27-9927

入試課メール → g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

格致によりて 人と社会の未来を拓く



国立大学法人

福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500（代表）

Schedule

10/21 Sat. 10 月月間合同カンファレンス **A** 日程
10/28 Sat. 10 月月間合同カンファレンス **B** 日程
11/18 Sat. 11 月月間合同カンファレンス **A** 日程
11/25 Sat. 11 月月間合同カンファレンス **B** 日程
12/17 Sun. 福井大学連合教職大学院入試説明会

【冬期集中講座】

12/23,24,25 Sat. Sun. Mon. Cycle a (予備日 12/26)
1/5,6,7 Fri. Sat. Sun. Cycle b (予備日 1/8)



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。
修了生や関係機関の方の投稿も大歓迎です。
関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】暑い夏、熱い夏期集中も終わり、過ごしやす季節になってきました。175号では、夏期集中や今年度前半の皆さんの学びや葛藤、それらの軌跡が語られています。そこから得られた充実感も感じることができ元気をいただきながらの編集となりました。ニュースレターはまだまだ熱いです。(H)

教職大学院 Newsletter No.175

2023.11.15 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科



教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp